# 新町II遺跡の調査

—富山県婦中町新町所在の古代・中世遺跡調査報告—

1986年3月

婦中町教育委員会

表紙写真　　新町Ⅱ遺跡の中世大型掘立柱建物

# 序　　文

私たちの祖先が築いてきた文化財を保護し未来に継承することは、現代に生きる私たちに課せられた責務といえます。立派な建造物や彫刻だけが文化財ではありません。土中に埋もれた埋蔵文化財のひとつひとつも大切な文化財であり、祖先の歩みと営みを如実に物語ってくれるものです。その基はなんといっても発掘調査にあります。その成果が大きければ大きいほど現代人の心をひきつけます。

この婦中町にも数多くの埋蔵文化財が知られています。とりわけ町の西方につらなる丘陵上は県下でも有数の遺跡の宝庫であります。大塚古墳や勅使塚古塚などはその代表的なものです。数年前からこの丘陵上で盛んに発掘調査が行われてまいりました。本書でとりあげた新町II遺跡の調査もそのひとつであります。

このたびの調査はほ場整備の施工に先だち、埋もれた文化財の確認ということで実施いたしました。これによって県下でも数少ない古代・中世の大型の掘立柱建物跡を検出するなど、多大の成果をおさめることができました。

この新町II遺跡の調査報告は小冊子ではありますが、古代婦負郡の歴史を解き明かすうえで捨てがたいものでありましょう。本書が地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いであります。

最後に、発掘調査に際しご援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、快く調査にご協力いただいた地元の新町地区の皆さんに深く感謝の意を表します。

1986年3月

婦中町教育委員会

# 目　　次


Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ　調査の概要 …… 2
1．既応の調査 …… 2
2．調査の経過 …… 3
Ⅲ　遺　構 …… 4
1．古代の遺構 …… 4
2．中世の遺構 …… 10
Ⅳ　遺　物 …… 14
1．古代の遺物 …… 14
2．その他の遺物 …… 16
3．出土遺物の年代 …… 16
Ⅴ　新町Ⅱ遺跡の古代掘立柱建物群の性格 …… 17
付載　新町Ⅱ遺跡出土の尖頭器 …… 奥村吉信 …… 23


# 例　　言

1．本書は富山県婦負郡婦中町新町地内に所在する新町Ⅱ遺跡の調査報告である。
2．調査は富山県埋蔵文化財センターの指導を受けて婦中町教育委員会が実施した。
3．調査費は文化庁と農林省の「覚書」第5項の規定にもとづき、富山県農地林務部の原因者負担を受け、地元農家負担分については昭和60年度文化庁および県費補助金の交付をえて婦中町教育委員会が負担した。
4．調査事務局は婦中町教育委員会に置き、社会教育係長大上正弘・社会教育主事田上浩幸が担当し、教育次長角間甚二が総括した。
5．発掘調査は富山県埋蔵文化財センター主任岸本雅敏・婦中町教育委員会社会教育主事田上浩幸が担当した。
6．本遺跡出土の尖頭器については奥村吉信氏に研究報告を執筆していただき、付載として本書に収録した。また鉄滓については富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事関清氏の教示をえた。
7．本書の編集は岸本雅敏が行ない、執筆は「Ⅳ　遺物」の章を田上浩幸が、その他を岸本が担当した。

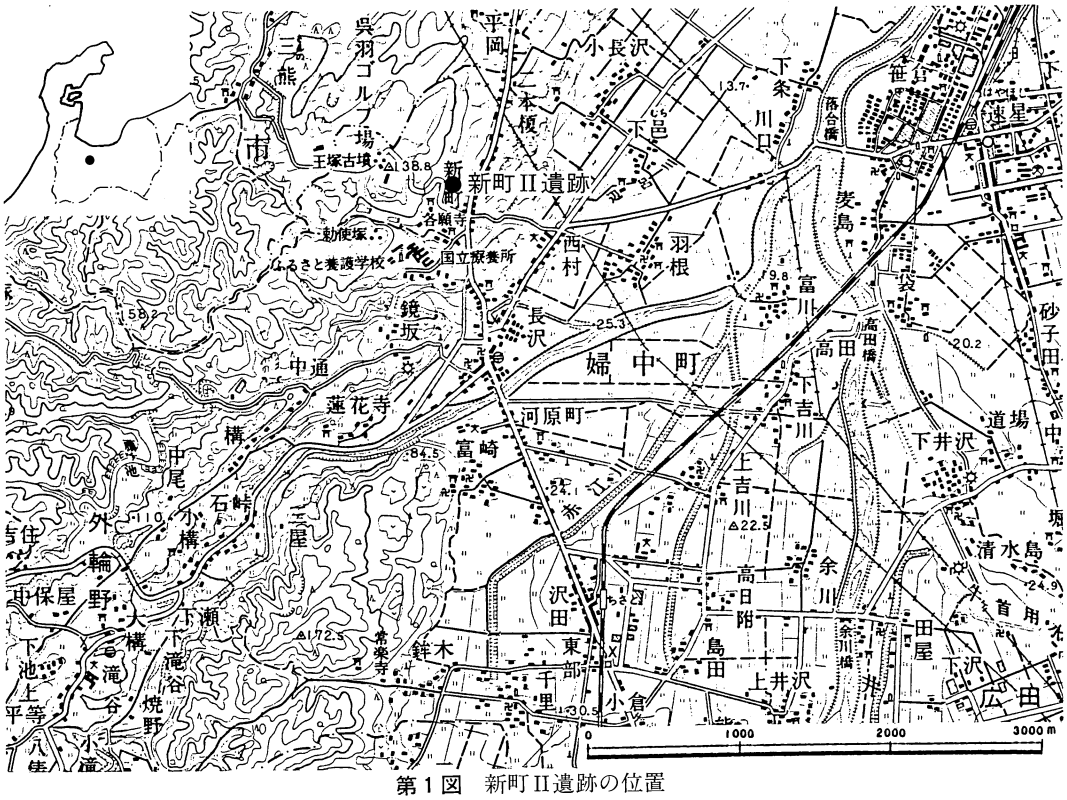
# Ⅰ　遺跡の位置と環境

富山県の代表的河川である神通川は多くの中小河川をあつめて北流し、富山平野をぬけてやがて富山湾にそそいでいる。その左岸には、富山市の西郊から南の婦中町にかけて呉羽丘陵が南北にのびている。富山県の地勢はこの呉羽丘陵によって東西に二分され、それぞれ「呉東」・「呉西」と称されている。

本書でとりあげる新町Ⅱ遺跡は、呉羽丘陵の南西につらなる羽根丘陵の東側裾野に位置し、婦負郡婦中町新町地内にある（第１図）。婦中町の中心市街、速星の西方約３kmにあたる。この一帯では、沖積平野より一段高い下位段丘が丘陵のふもとにみられ、こんにちでは県道八尾・小杉線にそって新町・二本榎・平岡などの集落が段丘上に形成されている。これらの集落の西側にはゆるやかな傾斜地がみられ、雛段状の水田地帯となっている（第２図・図版２）。遺跡は新町集落西側のこうした傾斜地に立地し、その標高は西端の高位部で66.7ｍ、東端の下位部では約62ｍである。

上にふれた段丘上とその周辺には、先土器時代から古代・中世にいたる各時代の遺跡が数多く形成されている。たとえば、新町Ⅱ遺跡の西方わずか 0.5kmには国指定史跡の古式の前方後方墳大塚古墳が、さらに谷ひとつへだてたその南には同じく前方後方墳の勅使塚古墳がみられる（第２図）。

（岸本雅敏）




第１図　新町Ⅱ遺跡の位置

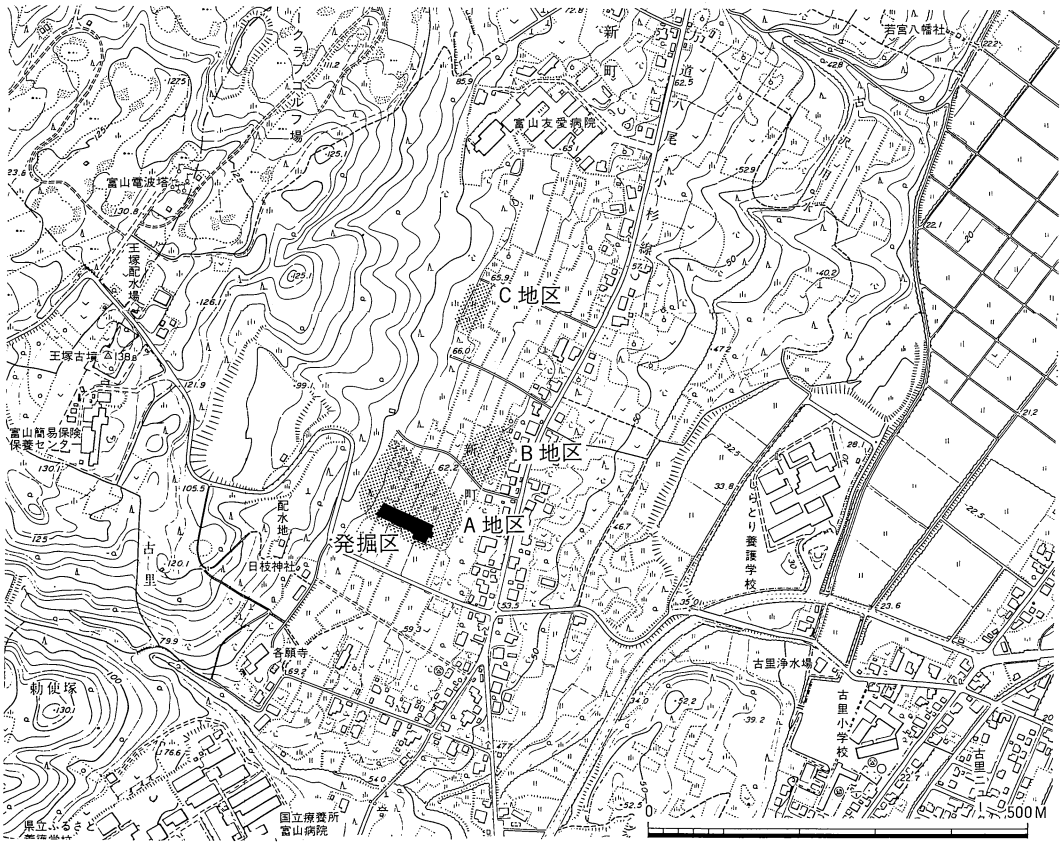
# II 調査の概要

## 1 既応の調査

**遺跡の発見** 呉羽丘陵から西方の射水(いみず)丘陵の一帯は富山県内でも有数の遺跡集中地帯として知られている。富山市・婦中町・小杉町にわたるこの丘陵地帯の山麓で県営畑地総合土地改良事業、つまり畑地の基盤整備が昭和58年度から実施されることになった。そこで婦中町教育委員会では当該地が遺跡の集中地帯であることを考慮して事前にその分布調査を実施した。調査は富山県埋蔵文化財センターの指導をえて同年4月に行い、その結果、施工計画地内で多くの遺跡をあらたに発見することができた。この新町II遺跡もそのひとつである。

**試掘調査** 分布調査を終えたあと、富山県教育委員会・婦中町教育委員会はその結果をもとに事業主体である県耕地課と遺跡の保護措置について協議した。それによって新町II遺跡は昭和60年度の施工区に含まれていることが判明したので、まずこの遺跡の範囲・性格を把握するために試掘調査を行うことにした。

この調査は施工前年の昭和59年秋に富山県埋蔵文化財センターの協力をえて婦中町教育委員会が実施した。その結果、3地区で遺構が確認され、南から順にそれぞれA・B・C地区と仮称し




**第2図** 新町II遺跡の位置と周辺の地形（1：10,000）

た〔宮田・田上1985〕。3地区の概略を記すとつぎのとおりである。

A地区：3地区のうち最も広い範囲を占め、遺構・遺物の集中密度も高い。直径15cmないし30cmの多数の柱穴、一辺80cm×150cmの長方形の穴、溝などが確認された。

B地区：直径20cmないし30cmの穴が検出され、掘立柱建物の柱穴と推定された。

C地区：直径70cmないし90cmの大きな穴3、15cmないし30cmの穴数箇所が確認された。

## 2　調査の経過

**協議経過と遺跡の保護措置**　試掘調査の終了後、県教育委員会・婦中町教育委員会・県耕地課とのあいだで協議をもち、遺跡の保護措置について検討した。試掘調査で確認された上記の3地区については、基本的には工事の設計変更によって現状保存することで合意した。しかしその後の検討の結果、段差のはげしいA地区の一部についてはやむなく「記録保存」調査を実施せざるをえなくなった。

**調査費用の負担**　A地区の発掘調査を実施するに先だって婦中町教育委員会では、県農地林務部との間に「農業基盤整備事業実施地区内埋蔵文化財包蔵地発掘調査費用負担契約書」を交し、調査費用の原因者負担を受けた。ただし農家負担分については文化財保護担当部局で負担した。これは農林省と文化庁との「覚書」（昭和50年5月23日）の第5項の規定にもとづくものである。

なお婦中町教育委員会では、「文化財保護担当部局」の負担分について国庫（文化庁）および県費補助金の交付を受けた。

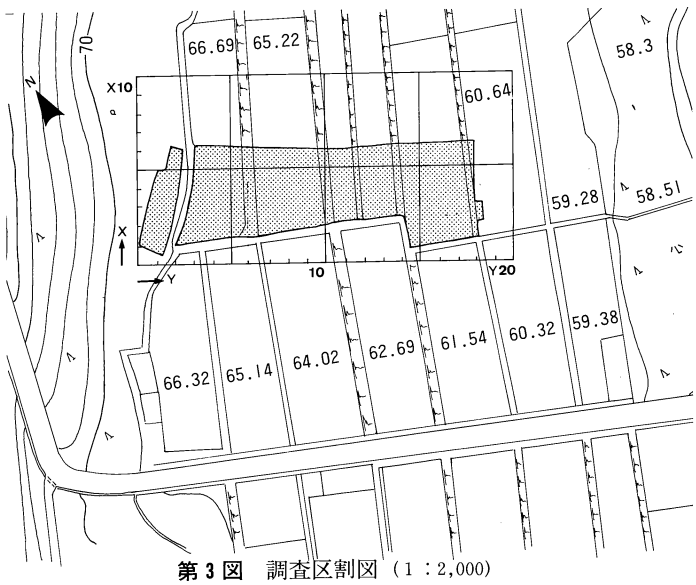
**調査の実施経過**　調査は婦中町教育委員会が主体となって、昭和60年5月8日から7月17日まで実施した。その総発掘面積は2,000㎡である。調査はまず重機を駆使して耕土とその下層の無遺物層を除去し、ついで南北にX軸、西から東へY軸をとって調査区を設定した（第3図）。

遺構の検出・発掘・記録は調査区西端の高位部から開始し、傾斜面にそって東方へと順次進めた。調査区西端の一画では試掘調査ですでに確認していた古代の掘立柱建物群・土壙群を検出した。

一方、調査区の中央部ではまとまった遺構を検出しえなかったが、南東端の一画で中世のものと考えられる大型の掘立柱建物1棟を完掘した。

なお、上記の調査終了後、西端の山麓（山林）にトレンチを設け、一部は面的に拡長した。

（岸本雅敏）




**第3図**　調査区割図（1：2,000）

# III 遺　　構

調査区西端の高位部で平安時代の掘立柱建物・柵・土壙・溝を検出した。また調査区の東端で四周に溝をめぐらせた特異な掘立柱建物、段状の遺構、さらにそれらを囲む溝を検出した。これらは中世以降に形成されたとみなしうるものである。

## 1　古代の遺構

### A　掘立柱建物・柵（第４・５図・図版３）

柱穴群から解読しえたのは掘立柱建物３棟、柵１列である。

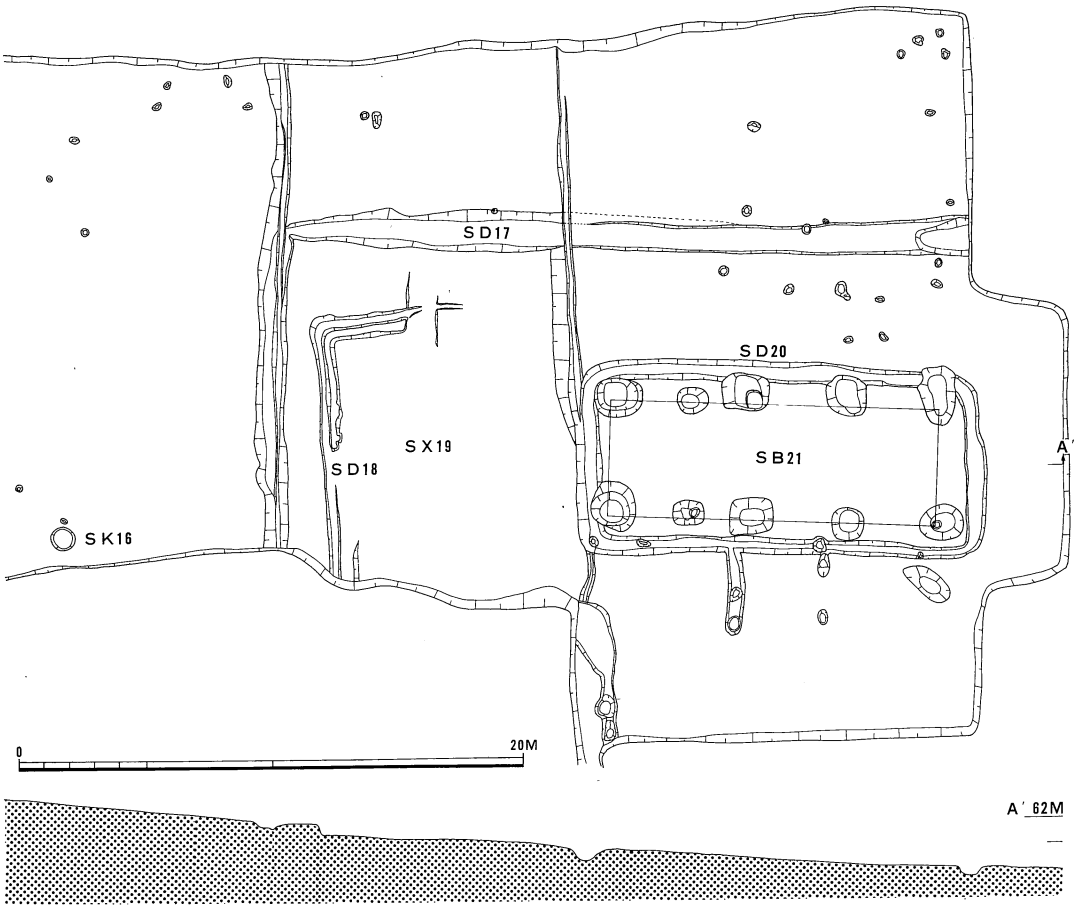
**ＳＢ01**　調査区西端の中央部で検出した桁行４間、梁間１間以上の南北棟。方位はＮ－23°－Ｅ。寸法は桁行総長 8.4ｍ、梁間 5.4ｍ。桁行の柱間は等間でなく、また東西の柱筋でもわずかに異なる。すなわち西側柱筋では南から順に 2.1ｍ（７尺）・2.25ｍ（ 7.5尺）、 1.8尺（６尺）、

**第４図**　遺構全体図（１：300）

2.25m（7.5尺）であり、東側柱筋では 2.1m（7尺）・2.25m（7.5尺）、2.1m（7尺）、1.95m（6.5尺）である。しかし桁行総長 8.4m（28尺）を柱間数4で割ると 2.1m（7尺）となり、桁行の柱間は7尺で計画されたと考えられる。

いっぽう梁間は1間でありながら 5.4m（18尺）と幅広い。北妻柱・南妻柱ともに柱穴の探索を丹念に試みたけれども検出しえなかった。建て替えられたＳＢ02との共通性を考慮すると梁間は 2.7m（9尺）×2＝ 5.4m（18尺）の「2間」を念頭において計画された可能性が大きい。

**ＳＢ02**　上記のＳＢ01と重複しており、柱掘方の重複からＳＢ01をわずかに西側へずらせて建て替えたものであることがわかる。桁行5間、梁間2間の南北棟建物。方位はＮ－22°50′－Ｅでほぼ並行する。寸法は桁行総長10.65m、梁間は5.4m。桁行柱間はＳＢ01と同じく等間でなく、わずかに異なる。東側柱間と西側柱間で違いがみられることもＳＢ01と同様である。西側柱間は南1間が 2.4m（8尺）、中3間が 2.1m（7尺）の等間、北1間が1.95m（6.5尺）。東側柱間は南から北へ 2.4m（8尺）・2.1m（7尺）・2.25m（7.5尺）・2.1m（7尺）・1.8m




（付図）千里支群　古墳測量図（1/500）

（6尺）である。桁行総長10.65m（35.5尺）を柱間数5で割ると2.13m（7.1尺）となり、桁行の柱間はやはり7尺を基本に計画されたとみなしうる。事実、西側柱筋の中3間は前記のとおり7尺の等間である。他方、梁間は柱間 2.7（9尺）の等間で、同じく完数尺が用いられている。以上、SB02は桁行柱間7尺、梁間柱間9尺を基本に計画された建物と考えられる。

なお、北妻柱筋はSB01のそれと重複しており、桁行4間のSB01を建て替えるに際して南側へさらに1間延長し、建物規模を拡大していることを看取しうる（第5図）。

**SB03** SB02に接してその南側で検出した桁行1間、梁間1間の東西棟建物。寸法は桁行4.95m（16.5尺）、梁間 2.1m（7尺）。東西の柱筋はSB01・02の妻柱筋と並行する。方位は主軸でみるとN－67°－Sと南西へ振っているが、妻柱筋（南北辺）のそれをとるとN－23°－Eとなり、SB01と同一方位となる。また東妻柱筋はSB01の東側柱筋と揃う。SB01の南妻柱筋との間隔は 3.3m（11尺）、SB02のそれとの間は0.1m(3尺）である。柱掘形は一辺45cm前後の隅丸方方形で大型である。建て替えはみられない。北西隅の柱穴から平安時代前期の須恵器の台付壺・杯蓋が出土した。

**SA04** SB01・02の東で検出した南北3間の柵である。柱間寸法は南2間が 2.7m（9尺）の等間、北1間が 2.4m（8尺）である。柱掘形は北から2番目のみが隅丸方形で爾余の三つは円形である。一辺または直径50cm前後で、前記の建物群の柱穴に比べて大型である。建て替えはない。方位はN－24°－EでSB01・02の棟方位と大差なく、それらとほぼ並行する。SB01の東側柱筋との間隔はちょうど 5.4m（18尺）である。また柵列の南端はSB01の南妻柱筋と、北端はその北妻柱筋と揃う。以上から柵SA04は建物01に伴ってほぼ同時に構築され、建て替えのないことから建物SB02の時期まで存続したと考えられる。

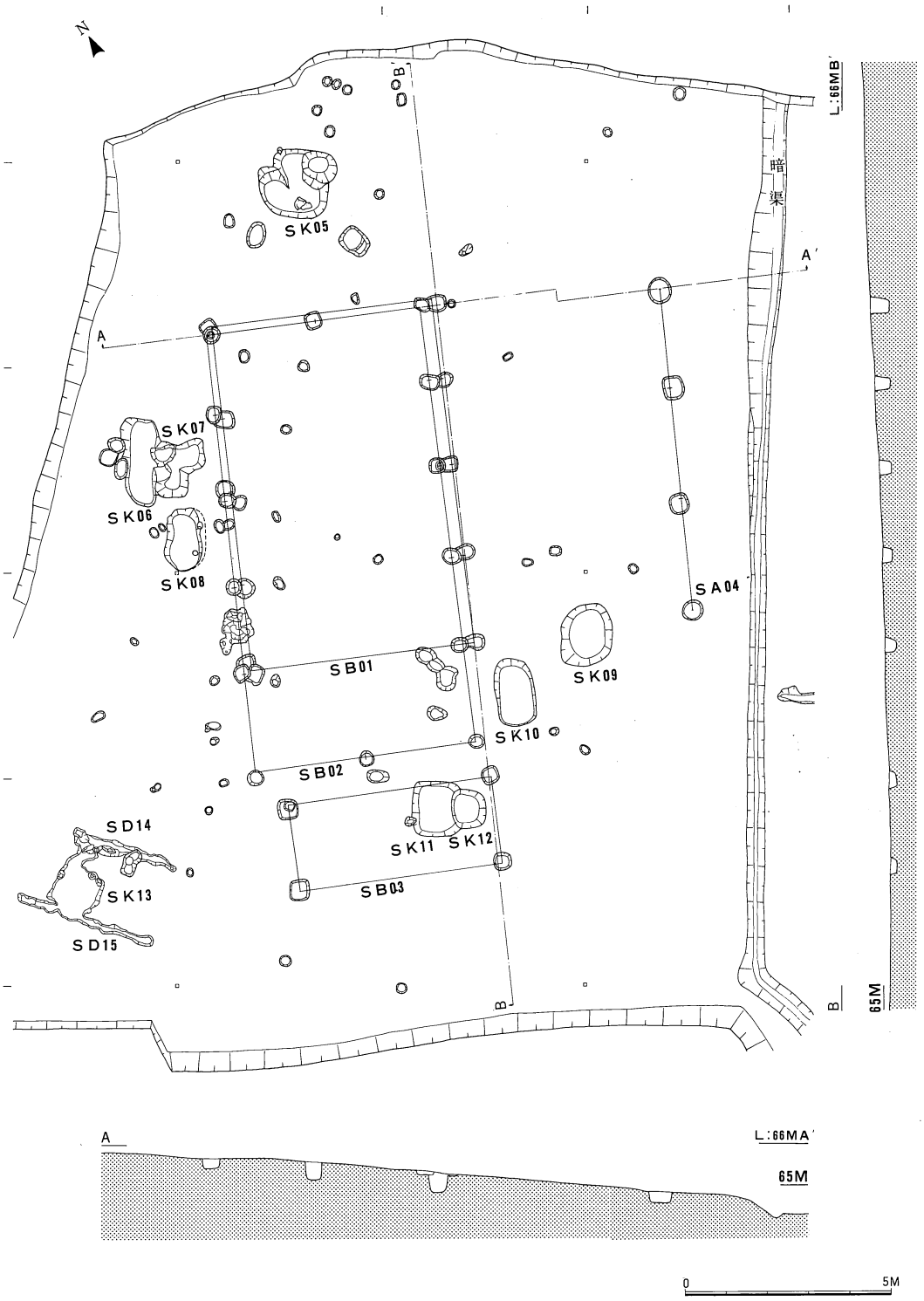
**B 溝**（第4・5図）

**SD14** SB03の西で検出した東西の溝である。全長3m、幅15cm前後、深さ約10cm。土壙SK13に接してその北にある。

**SD15** 全長 3.6m、幅約10cm、深さ約6cmの東西の溝。SK13に接してその南にある。

| 遺構名 | 棟・柵の方向 | 方位 | 柱間数 桁×梁 | 規模 m 桁×梁(尺) | 柱間 m（尺） 桁 | 柱間 m（尺） 梁 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SB 01 | 南北棟 | N－23°－E | 4×1 | 8.4×5.4 (28) (18) | 2.1・2.25・1.8・2.25 (7) (7.5) (6) (7.5) 2.1・2.25・2.1・1.95 (7) (7.5) (7) (6.5) | 5.4 (18) | |
| SB 02 | 南北棟 | N－22°50′－E | 5×2 | 10.65×5.4 (35.5) (18) | 2.4・2.1・2.1・2.1・1.95 (8) (7) (7) (7) (6.5) 2.4・2.1・2.25・2.1・1.8 (8) (7) (7.5) (7) (6) | 2.7・2.7 (9) (9) | |
| SB 03 | 東西棟 | ※ N－22°50′－E | 1×1 | 4.95×2.7 (16.5) (9) | 4.95 (16.5) | 2.7 (9) | ※南北辺からの方位を示す |
| SA 04 | 南北 | N－24°－E | 3 | 7.8 (26) | 2.7・2.7・2.4 (9) (9) (8) | | 東柵 |

**表1** 建物・柵一覧 （ゴチック体は完数尺）




**第 5 図**　掘立柱建物群実測図（1 ：160）

C　土壙（第６・７図、図版４）

調査区西端の掘立柱建物群の周辺で計９の土壙を検出した。覆土は掘立柱建物・柵のそれと同じく黒色または黒褐色で、出土土器からもそれらと同時期のものである。

**ＳＫ05**　ＳＢ01・02の北で検出した隅丸方形に近い不整形の土壙である。一辺 1.7ｍ、深さ25cm。土壙内の南端に床面に接して自然石が２個みられた。その周辺から須恵器の杯蓋、土師器甕の口縁部の破片が出土した。土壙内の北東隅に長径90cm、短径70cmの不整円形の穴があり底面は一段深い。深さ65cmで擂鉢状を呈する。

**ＳＫ06**　ＳＢ01・02の西で検出した不整長楕円形の土壙である。南北に長軸をおく。長辺2.2ｍ、短辺85cm、深さ20cm。底面はほぼ平坦である。東肩はＳＫ07に、西肩は二つの柱穴に切られている。

**ＳＫ07**　ＳＢ01・02に接してその西で検出した不整形の土壙。西肩はＳＫ06と重複する。南北1.3ｍ、東西約 1.2ｍ、深さ10cm前後。北西隅の底面に長径60cm、短径40cmの不整円形の穴がある。深さ20cm。

**ＳＫ08**　ＳＢ01・02の西で検出した長楕円形の土壙。南北に長軸をおく。ＳＫ07に南接する。長径 1.5ｍ、短径95cm、深さ23cm。底面はほぼ平坦。底面に４個の、北東の肩に１個の小穴がみられる。東肩は試掘調査時のトレンチで削平されている。

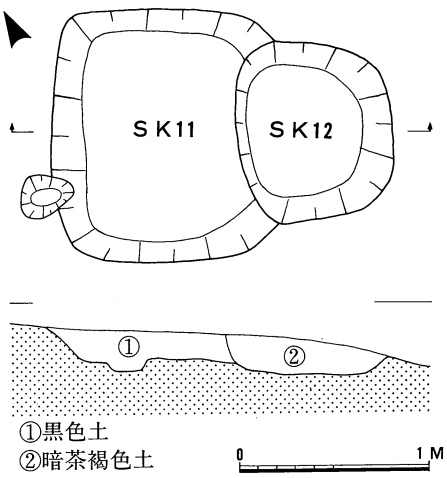
**ＳＫ09**　ＳＢ01・02とＳＡ04との中間で検出した楕円形の土壙。ＳＢ01の南妻柱筋の延長線上に位置する。長径1.66ｍ、短径1.24ｍ、深さ28cm。底面はほぼ平坦で南端ではわずかにくぼむ。覆土内から須恵器の杯・杯蓋、土師器の小片が出土した。

**ＳＫ10**　ＳＢ02の南１間の東で検出した長楕円形の土壙。ＳＢ02の東側柱筋とほぼ並行して南北に長軸をおく。長径 1.7ｍ、短径96cm、深さ25cmないし28cm。底面はほぼ平坦である。形状・規模ともにＳＫ08に近い。

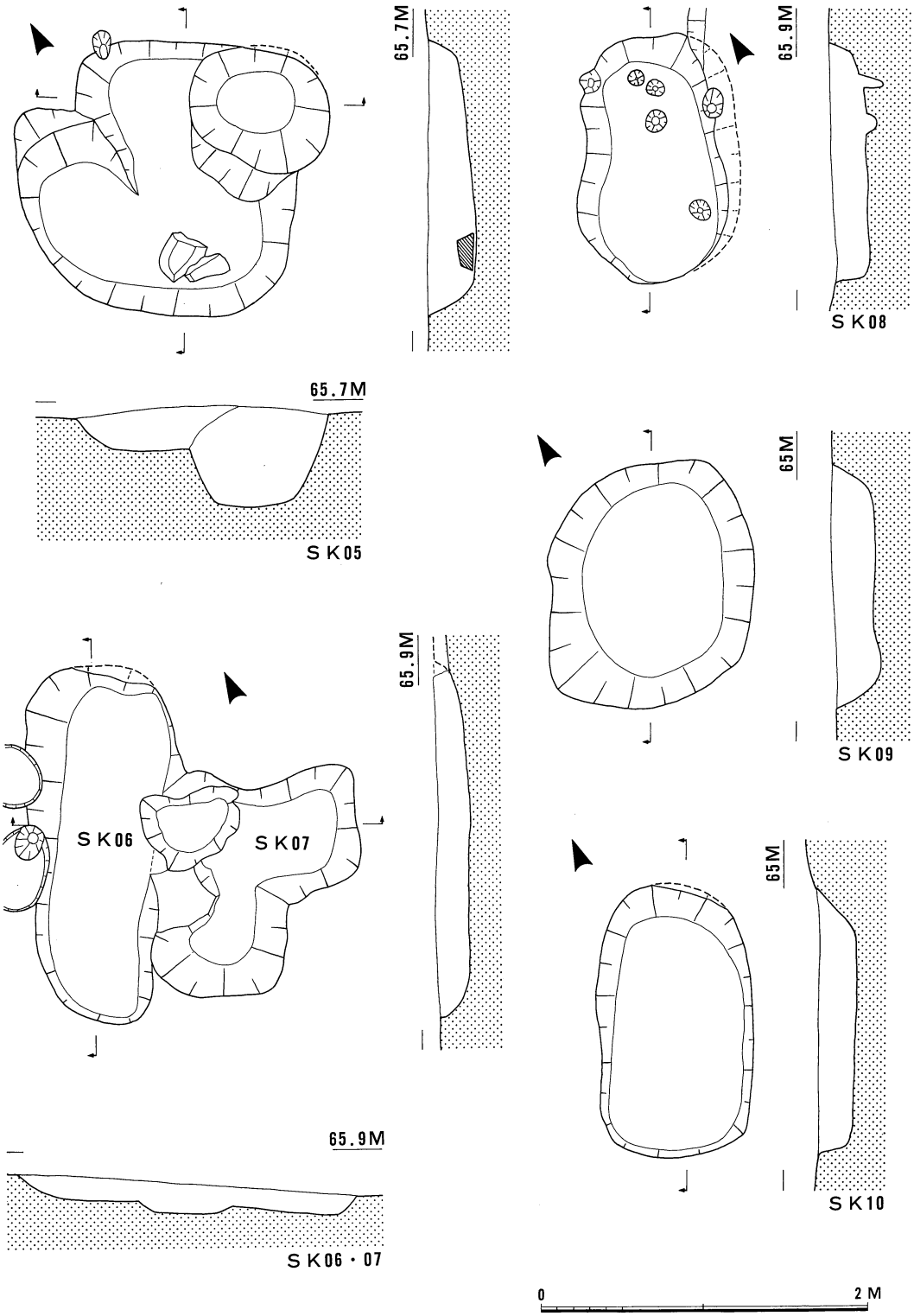
**ＳＫ11**　ＳＢ03内の東北隅で検出した隅丸方形の土壙。東端はＳＫ12と重複しそれに切られている。一辺 1.3ｍ、深さ15cm。覆土内から土師器甕の口縁部が出土している。

**ＳＫ12**　ＳＫ11と同じくＳＢ02の南東端で検出した隅丸方形の土壙。西端はＳＫ11と重複しており、それよりも新しい。遺構検出面での規模は東西84cm、南北96cm、深さ20cmでＳＫ11よりもわずかに深い。底面はほぼ平坦である。

**ＳＫ13**　調査区の南西の隅、ＳＢ03の西で検出した土壙状の遺構である。東西の溝ＳＤ14とＳＤ15との中間にある。南北 1.6ｍ、東西 1.2ｍをはかり不整形である。深さは６cm前後できわめて浅い。底面には縁辺にそって小穴がある。覆土内から須恵器の杯の口縁部、土師器の小片が出土している。




**第６図**　土坑実測図(1)（１：40）




**第7図**　土坑実測図(2)（1：40）

## 2　中世の遺構

調査区の東南の一画で中世のものと推定される掘立柱建物・溝・段状遺構を検出した。

**A　掘立柱建物**（第８・９図、図版５・６）

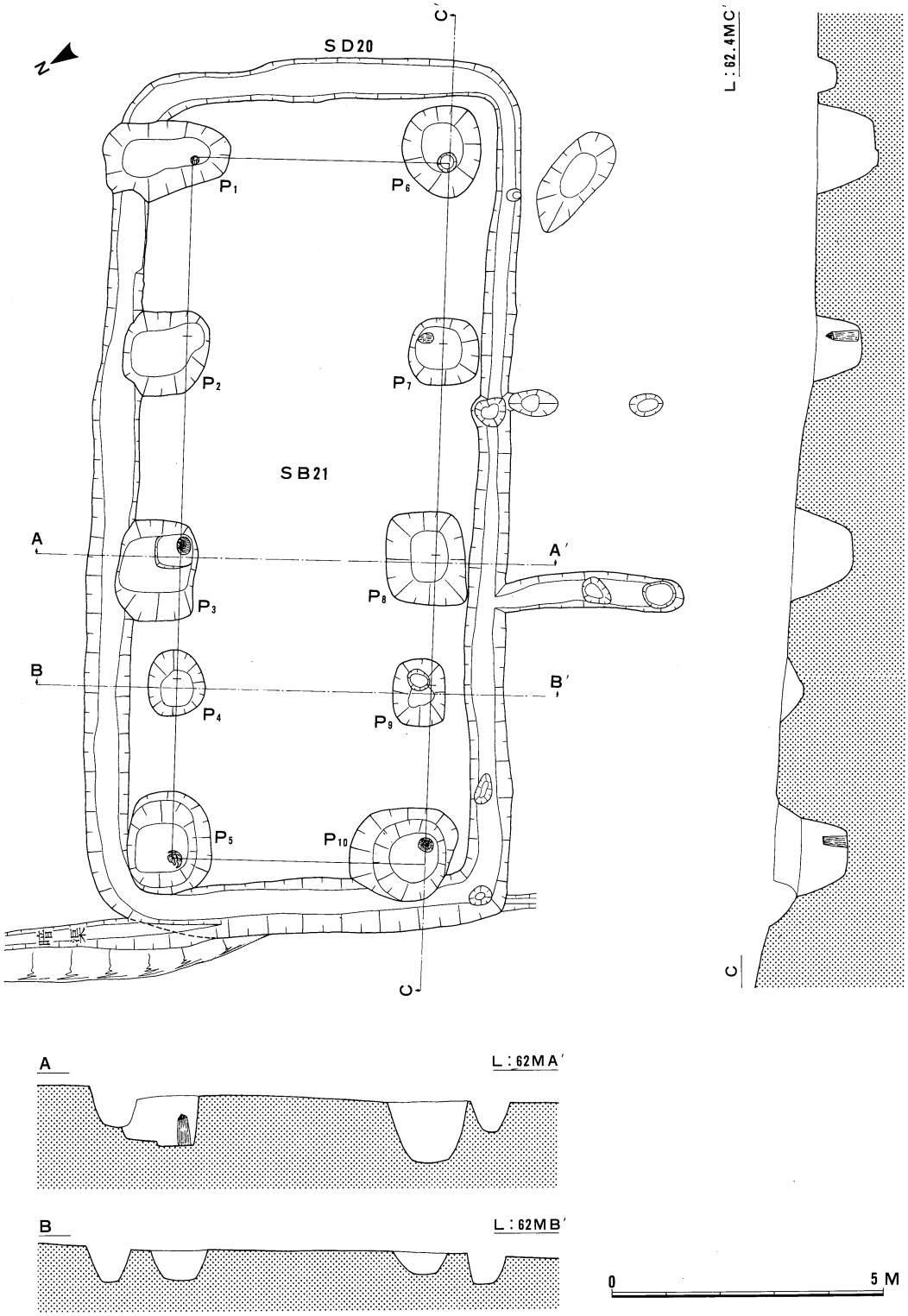
**ＳＢ21**　四周に周溝をめぐらせた大型の掘立柱建物である。桁行４間、梁間１間の東西棟で、寸法は桁行総長12.9ｍ、梁間4.65ｍである。桁行の柱間寸法は西から東へ 3.3（11尺）、2.4ｍ（８尺）、3.9ｍ（13尺）、3.3ｍ（11尺）である。このように西１間と東１間はともに3.3ｍの等間であるが、中２間は不統一である。柱穴は大きさ・深さの違いから二種にわかれる。北側柱筋の西から２番目（$P_4$）とそれに対応する南側柱筋の西から２番目（$P_9$）のみは爾余のものに比べて小型で浅い。$P_4$の柱掘形は長径1.2ｍ、短径１ｍの楕円形で深さは約50cmである。これに対応する$P_9$は長辺1.26ｍ、短辺0.96ｍの隅丸方形を呈し、深さはやはり約50cmである。

その他の柱穴は長径または一辺が 1.8ｍ前後、深さ約 1.2ｍの大型のものである。北側柱筋西端の柱穴$P_5$では長径1.9ｍ、短径1.64ｍあり、深さは１ｍである。柱掘形の平面形には隅円方形・楕円形・長楕円形がある。北側柱筋の$P_1$・$P_3$・$P_5$、南側柱筋の$P_6$・$P_7$・$P_{10}$には柱根をとどめていた。$P_{10}$の柱痕は直径40cmの太いものである。

上にのべた柱穴規模の違いから小型の$P_4$と$P_9$の柱は補助柱であり、爾余の８本が主柱であったと推定される。第９図に復原したこの掘立柱建物の平面積は60㎡である。

なお北側柱筋の柱穴は小型の$P_4$を除いて周溝ＳＤ20によってその北側の肩部を切られている。また南側柱筋の西端の柱穴$P_{10}$も同じくその西肩部を切られている。出土遺物は皆無である。

**第８図**　掘立柱建物ＳＢ21全景　西から




**第9図**　掘立柱建物ＳＢ21実測図（1：120）

**B　溝**（第９・10図、図版５）

**ＳＤ17**　掘立柱建物ＳＢ21と後述する段状遺構ＳＸ19の外側をとり囲む溝である。ＳＢ21の北側では建物の主軸に並行して東西に直線的にのびる。ＳＢ21の外周溝ＳＤ20との間隔は約４ｍである。段状遺構ＳＸ19の北東部でほぼ直角に南へ折れ、それに並行して直線的にのびる。ＳＢ21の南西部でその延長部分と推定される溝を検出しているので、南にのびた溝は未掘区でさらに東へ折れ、それにつらなるものと推定される。したがってこの溝は少なくともコの字形となり、ＳＢ21の南西で南側の未掘区にのびるとみてよい。ＳＢ21の北方の東西部分では幅広く、約 1.6ｍある。深さは40cm前後である。ＳＸ19に並行する南北部分での幅は90cm前後である。なお、この部分では近代の暗梁排水溝が重複している。ＳＤ17の覆土内から珠洲系陶器の甕の破片（第11図39）が１点出土した。

**ＳＤ18**　段状遺構ＳＸ19に付属する細く浅い溝で、その外側にとりつく。南北に直線的にのび、ＳＸ19の北西の隅でそれにそってほぼ直角に東へおれる。その東端は途切れる。幅約50cm、深さ15cm前後である。ＳＸ19の排水溝と考えられる。出土遺物は皆無である。

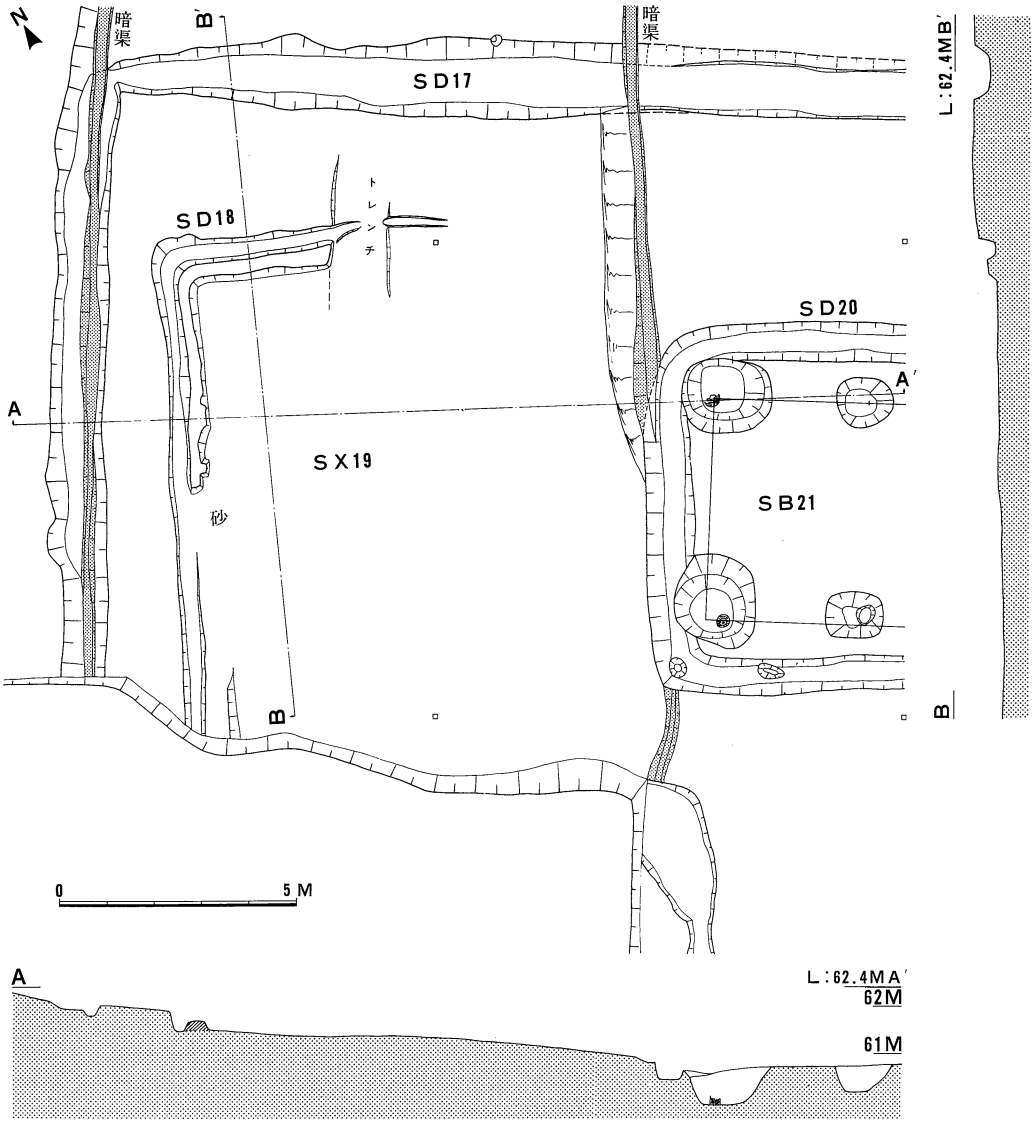
**ＳＤ20**　掘立柱建物ＳＢ21の外周を長方形にめぐる溝である。幅60cmないし80cm、深さ50cmないし60cmである。東西辺・南北辺ともに直線的にのび、四隅では丸くなる。南側柱筋の西２間目、柱穴$P_8$の前から南へＴ字状に溝がのび、行きどまる。その長さは 3.5ｍである。

**C　段状遺構**（第10図）

**ＳＸ19**　掘立柱建物ＳＢ21の西側で検出したテラス状の遺構である。西辺と北辺の外側には上記の細い溝ＳＤ18がある。溝の内側には高さ12cm前後、幅40cm前後の土堤が造られている。土堤の横断面は台形を呈する。粘土質の黄褐色土を用いている。東側にはこの土堤がみられず遺構の東辺は不明である。また南側も未調査であるためわからない。南北10ｍ以上、東西６ｍないし７ｍの方形プランの遺構と推定される。土堤に囲まれた遺構の内側の床面はほぼ平坦である。黄褐色の地山を約30cm掘りさげて造りだしている。床面とその周囲には柱穴はない。

西辺の土堤に接してその中ほどの一画にかなりの量の砂が集中して検出された。また周辺の排土中から椀形滓（鍛冶滓）が採集されていることと考えあわせると、この段状遺構は小鍛冶に関係する工房とも推定される。

**遺構群の性格**　建物ＳＢ21とその周溝ＳＤ20、段状遺構ＳＸ19とその排水構ＳＤ18、それらを大きくとり囲む溝ＳＤ17の覆土はともに同質であり、古代のものとは区別される。したがってこれらの遺構は同時代のものとみなしうる。年代の決め手となるのはＳＤ17出土の珠洲の破片１点のみである。その年代は「13世紀後半～14世紀前半」とのべたが、これは遺構の上限を示すものにすぎない。ＳＢ21にみられる直径１ｍをこえる大型の柱穴は、県内では福光町香城寺遺跡〔岸本1983〕など室町時代以降に認められるものであるから、この一連の遺構群の形成時期も14世紀後半以降、中世末と推定されるだろう。建物ＳＢ21は家屋、ＳＸ19はそれに付属する工房的施設、それらをとり囲むＳＤ17の内側はひとつの宅地の範囲と考えられるだろう。　（岸本雅敏）




**第10図**　段状遺構ＳＸ19実測図（1：160）

# Ⅳ 遺　　物

今回の調査で出土した遺物は、調査区西端の遺構群が検出された地区での出土が大半を占めており、それ以外の地区での出土は極端に少ない。時代は先土器時代から近世にまで至るが大部分は古代の遺物である。なお、先土器時代の遺物については、後掲の奥村吉信氏による研究報告（付載）を参照されたい。

## 1　古代の遺物

古代の遺物には須恵器と土師器がある。これらは調査区西端で検出された遺構群に伴うものと考えられる。

**A　須恵器**（第11図・図版７）

器種には蓋・杯・壺・甕がある。

蓋は口径約12cm～17cmまでの大きさのものがある。口縁端部の形状には、ほぼ直角に折れまがり断面が三角形のもの(1)と丸みをおびて内側へ折れまがるもの(2･3･5)の2種ある。いずれも天井部・口縁部内外面ともにロクロナデに仕上げるものが多い。天井部外面をヘラケズリする個体もある。３はＳＢ03、５はＳＫ09出土。

杯は無高台の杯Ａ（15～19)、高台付の杯Ｂ（６～11）の２種ある。杯Ａは体部内外面及び内底面をロクロナデにより仕上げ、外底面をヘラキリ後ナデにより仕上げる。杯Ｂは高台の形状より、外側へややふんばるもの（９・10）、ほぼ直角につくもの（６～８・11）の２種に分けることができる。いずれも体部内外面及び内底面をロクロナデにより仕上げ、外底面にヘラキリ痕を残す。11はＳＫ09、13はＳＫ13出土。

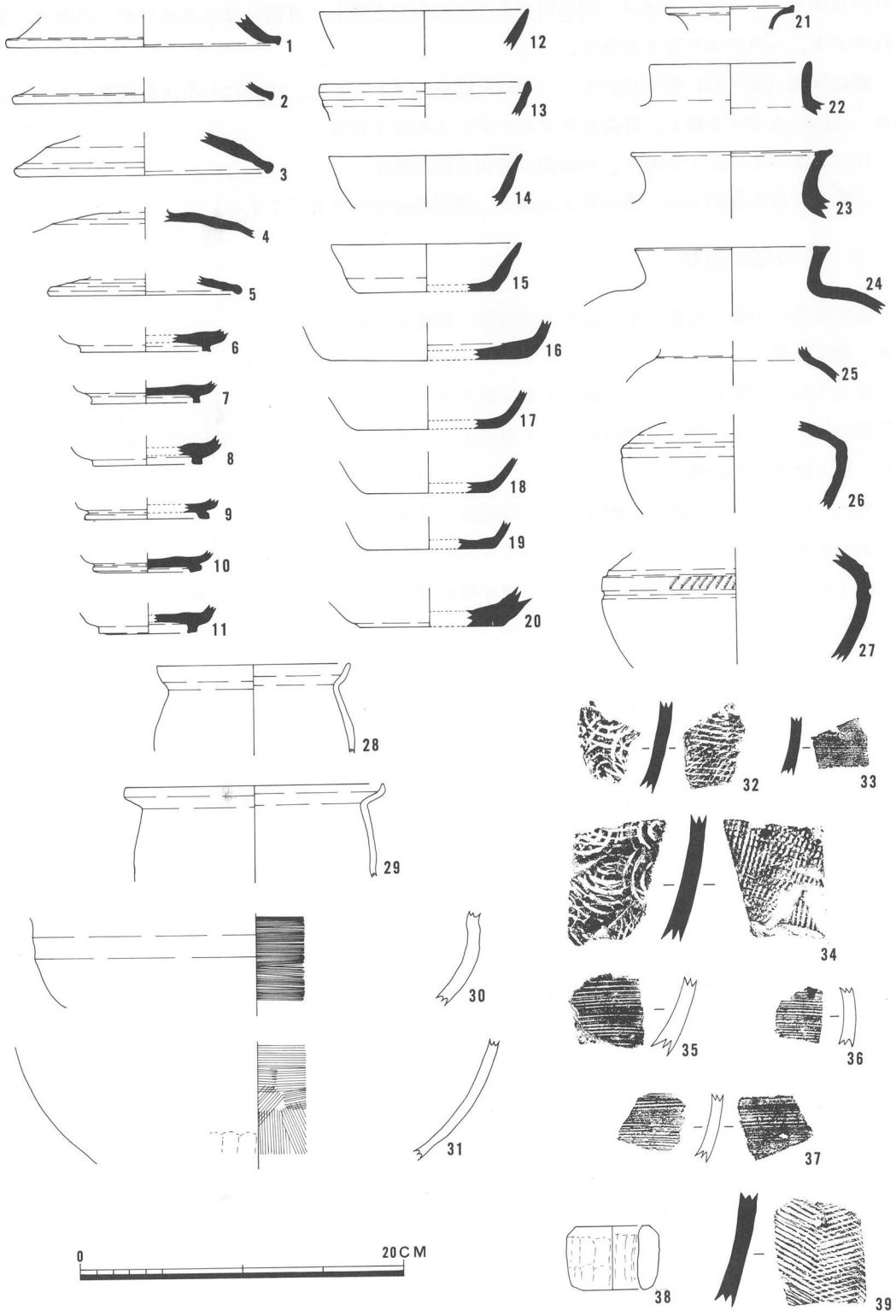
壺には口縁部（21～24)、肩部（25～27)、胴部、底部⑳の出土がある。口縁部には口径約８cmの薄手のもの㉑、胴部からほぼ直角に立ち上がるもの㉒、やや外反し終るもの（23・24）がある。いずれも内外面ともにロクロナデにより仕上げる。肩部には２本の沈線をめぐらしその間に櫛状工具による刺突文を施したもの㉗と肩部に１条の細い沈線をめぐらしたもの㉖がある。前者は内外面ともにロクロナデにより仕上げ、後者は外面にヘラケズリをなす。胴部は小片が数点出土している。内外面ともロクロナデにより仕上げるものが多いが、外面をヘラケズリするもの、カキ目を残すもの㉝内面にあて痕をわずかにとどめて外面に平行タタキを残すものもある。底部は１点出土しており内面をロクロナデ、外面をヘラケズリする。26はＳＢ03、26はＳＤ17出土。

甕は胴部の小片（32・33）が数点出土している。内面に同心円文あて具痕、外面に平行タタキを残すものが多いが、外面に格子タタキするものもある。

**B　土師器**（第11図・図版７）

器種には甕・鍋・杯がある。ほかに土師質の土錘がある。

甕は口縁部と胴部がある。口縁部には外反しながら立ち上り内側へゆるやかにカーブし終わるもの㉘とするどく屈曲し断面が「く」の字状を呈するもの㉙がある。胴部は小片が数点ある。内面には




**第11図**　出土遺物実測図（1：4）

ロクロナデ、ハケメ、カキメ、同心円文あて具痕などを残し、外面にはロクロナデ、ハケメ、平行タタキ、ヘラケズリなどを残す。

鍋は胴部（30・31）が2点ある。一つは外面をヘラケズリし、内面にハケメを残す。もう一方は、内面にカキメを残し、外面をロクロナデにより仕上げる。

杯は底部の小片が1点あり、外底面に糸切り痕を残す。

土錘㊳は最大径約6cm、高さ約4cmあり、胴部外面をヘラケズリする。

## 2　その他の遺物

縄文時代の土器・石器、中・近世の陶磁器、鉄滓などがある。

### A　縄文時代

縄文土器、打製石斧がある。縄文土器は数点出土しているが、いずれも小片で磨滅がはげしく器種のわかるものはない。打製石斧は1点出土しており、バチ型のもので下部欠損する。

### B　中・近世、その他

珠洲、伊万里、越中瀬戸、唐津などの陶磁器、鉄滓がある。

珠洲は綾杉状のタタキを施した胴部の小片㊴でSD17からの出土である。

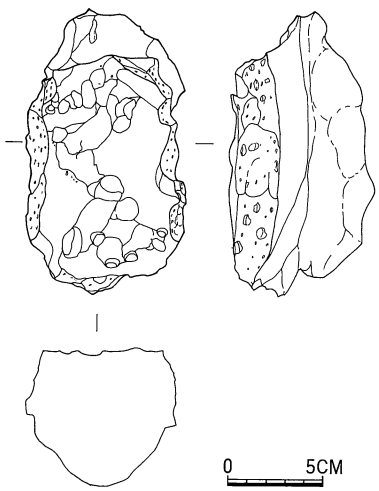
鉄滓は断面がカマボコ型を呈するいわゆる椀形滓で、下部は楕円形の火穴の形状をとどめ上部両端を欠損する。県内では婦中町友坂遺跡〔狩野他1984〕、砺波市高沢島遺跡〔橋本他1978〕に出土例がある。

## 3　出土遺物の年代

出土した遺物は少量でかつ小片であるが断片的にみえる特徴でおおまかな時期をつかむことができる。

須恵器には古墳時代の特徴をもつもの㉗が1点あるが、それ以外は杯蓋天井部にヘラケズりする個体があること、杯蓋口縁端部が丸みをもって折れまがるものが多いことが特徴として上げられる。県内で類例をさがすと高沢島II遺跡〔橋本他1978〕、佐伯遺跡〔橋本他1979〕にみることができる。土師器においても㉘の口縁部の特徴は高沢島II遺跡、㉙の口縁部の特徴は佐伯遺跡にみることができる。以上のことから新町II遺跡出土の須恵器・土師器は平安時代前期にその所属年代をおくことができる。

須恵器・土師器以外で注目すべきものはSD17から出土した珠洲がある。胴部小片1点のみ出土であるが、綾杉状のタタキメをもつもので、吉岡康暢氏の編年〔吉岡1981〕ではII～III期の特徴として上げられ、13世紀後半～14世紀前半にその所属年代が求められる。（田上浩幸）



**第12図**　鉄滓実測図（1：4）

# V　新町II遺跡の古代掘立柱建物群の性格

## 1　はじめに

富山県における古代掘立柱建物群の研究は1971年の井波町高瀬・入善町じょうべのま両遺跡の発掘調査を契機として開始されたといってよい〔高島・橋本・舟崎1974〕。その後、魚津市の佐伯遺跡や上市町の東江上遺跡でも古代掘立柱建物群が検出され、さらに近年では小矢部市の桜町遺跡で7世紀代以降の大規模な建物群が確認され新たな研究段階を迎えている。

ここでは富山県下の古代掘立柱建物群を総括的にとりあげることはできないが、既応の発掘成果に照らしながら新町II遺跡で検出された古代掘立柱建物群の性格について検討を加えてみたい。

## 2　掘立柱建物群の構成

今回の調査で検出された掘立柱建物はわずか3棟である。1984年の試掘結果から明らかなとおり今回の調査対象区は山麓に形成された古代集落の南端の一画を占めているにすぎない。したがってこれをもって集落構造を明らかにすることはむずかしいが、3棟の建物の分析をとおして集落の性格についてもふれることにする。

### A　建物の規模と構造

検出された建物には廂付建物や総柱建物などはみられない。まずこの点を確認しておこう。

**柱間数の検討**　第1期の建物ＳＢ01は桁行4間、梁間1間、それを建て替えたII期の建物ＳＢ02は桁行5間、梁間2間である。また小型の建物ＳＢ03は桁行・梁間ともに1間である。これらのうち5間×2間のＳＢ02の存在は以下のべる理由からとくに注目してよい。

いま富山県下で検出された主要な掘立柱建物群をとりあげ、その柱間数を示すと表2のごとくである。とりあげた79棟のうち3間×2間のものが34棟でもっとも多く、全体の43%を占める。この傾向は石川県下についても同様で、213 棟のうち61棟（28.6%）である（表2）。ついで多いのが2間×2間（10棟）と4間×3間（9棟）で、これと3間×2間（34棟）をあわせると全体の67%に達する。石川県下においては4間×2間（33棟）、4間×3間（23棟）がついで多くこれと3間×2間（61棟）をあわせると 117棟（55%）となり、やはり過半数を占める。これらは遺跡の性格と考えあわせると集落遺跡の建物の主体を占めるものであって、とりわけ3間×2間の建物は一般集落の基本的建物規模とみなしうる。ちなみに魚津市の佐伯遺跡（集落遺跡）では計21棟のうち3間×2間のものが14棟で全体の67%に達する。

それに対し5間×2間以上のものは富山・石川両県下ともに数少ない。富山県下では10棟（13%）でわずか1割強にすぎない。しかもそれは高瀬遺跡の石仏地区やじょうべのま遺跡のＡ・Ｂ地区など官衙遺跡に準ずる庄家跡地区に集中している。またその多くが廂付建物であることも見逃せない。上記のほかには小矢部市桜町遺跡の産田地区に1棟（ＳＢ05）、本書でとりあげた新町II遺跡ＳＢ02の2棟のみである。石川県下でも5間×2間以上のものは28棟（13%）で、やはり全体の1割強を占めるにすぎない。

以上の柱間数の検討から明らかなように、新町II遺跡で検出された5間×2間の建物ＳＢ02は集落遺跡の掘立柱建物としては数少ない大型建物であるといえる。以下、この点を建物の平面積を検討することによってさらに裏づけたい。

**平面積の検討**　ＳＢ01は桁行総長 8.4ｍ、梁間総長 5.4ｍでその平面積は45㎡である。5間×2間のＳＢ02では桁行総長10.65ｍ、梁間総長5.4ｍでその平面積は57.5㎡となる。小型のＳＢ03では床面積13㎡である。

さて、富山県下の主要な古代掘立柱建物群の平面積を図化すると第13図のごとくである。図から看取できるように建物の大部分は平面積が50㎡以下であって、平均すると30㎡前後のものが圧倒的に多い。これは柱間数との関係に置きかえれば、前述のとおり3間×2間の小規模建物が多数を占めていることに対応する。

| | 遺跡名＼柱間数 | 1×1 | 2×1 | 2×2 | 3×1 | 3×2 | 3×3 | 4×1 | 4×2 | 4×3 | 5×2 | 5×3 | 5×4 | 6×2 | 6×3 | 6×4 | 7×2 | 9×2 | 10×3 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 富 | じょうべのま遺跡(A・B地区) | 2 | 1 | 2 | 1 | 5 | | | 1 | 1 | 2 | 3 | | | | | | | 1 |
| | 高瀬遺跡（石仏地区） | | | | | | | | | | | | 2 | | | | ? | | |
| | 高瀬遺跡（穴田地区） | | | | | 2 | | | 2 | | | | | | | | | | |
| 山 | 佐伯遺跡 | 2 | | 4 | | 14 | | | 1 | | | | | | | | | | |
| | 桜町遺跡（産田地区） | | 2 | 2 | | 13 | | | 2 | 8 | | 1 | | | | | | | |
| | 東江上遺跡 | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 県 | 新町II遺跡 | 1 | | | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | |
| | 富山県（小計） | 5 | 3 | 10 | 1 | 34 | | 1 | 6 | 9 | 3 | 4 | 2 | | | | | | 1 |
| | 柳田シャコデ遺跡 | 1 | | | | 1 | | | | 3 | | 1 | | | | 1 | | | |
| | 美麻那比古神社前遺跡 | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 宮地廃寺 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| 石 | 北川尻ホシバ山遺跡 | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| | 徳前Ｃ遺跡 | 1 | 2 | | | | 1 | | 1 | 3 | | | | | | | | | |
| | 八幡昔谷遺跡 | 1 | | 1 | | 9 | | | 1 | 1 | | | | | | | | | |
| | 横江荘々家跡 | 1 | 1 | | | | | | 4 | 1 | | 1 | | | | | | | |
| | 藤江Ａ遺跡 | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| | 御経塚Ｂ遺跡 | | | 3 | | 2 | | | 2 | 1 | | | | | | | | | |
| | 西島遺跡 | | | | | | | | 4 | | | | | | | | | | |
| | 寺家祭祀遺跡(大型建物群) | | 1 | | | 3 | | 1 | | | | | | | | | | 1 | |
| 川 | 戸水Ｃ遺跡 | | 1 | 1 | | | | | 3 | | 1 | | | | | | 2 | | |
| | 津波倉遺跡 | | 1 | | | 2 | | | 1 | | | | | | | | | | |
| | 大野木タキシロ遺跡 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 法仏遺跡Ｂ地区 | | 1 | 1 | | | 1 | 1 | 3 | 2 | | | | | | | | | |
| | 〃　Ｂ′地区 | | | | 1 | 1 | 2 | | 1 | 1 | | | | | | | | | |
| | 〃　Ｃ・Ｄ地区 | | 4 | 2 | | 3 | 3 | | 4 | | 2 | 2 | | 1 | 1 | | | | |
| | 〃　Ｉ地区 | | 3 | | | 3 | 1 | | | | | | | | | | | | |
| | 〃　Ｏ地区 | | | | | | | | 2 | 1 | | | | | | | | | |
| | 〃　Ｌ地区 | | 2 | | 1 | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | |
| 県 | 安原工業団地遺跡 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| | 安養寺遺跡 | | 1 | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | 1 | | |
| | 末松廃寺 | | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 | | | |
| | 石川県（小計） | 4 | 17 | 14 | 2 | 27 | 8 | 2 | 27 | 14 | 3 | 4 | 1 | 2 | 2 | 2 | 3 | 1 | |
| | 富山県・石川県合計 | 9 | 20 | 24 | 3 | 61 | 8 | 3 | 33 | 23 | 6 | 8 | 3 | 2 | 2 | 2 | 3 | 1 | 1 |

**表2**　富山・石川二県の古代掘立柱建物の規模〔湯尻1983〕に加筆

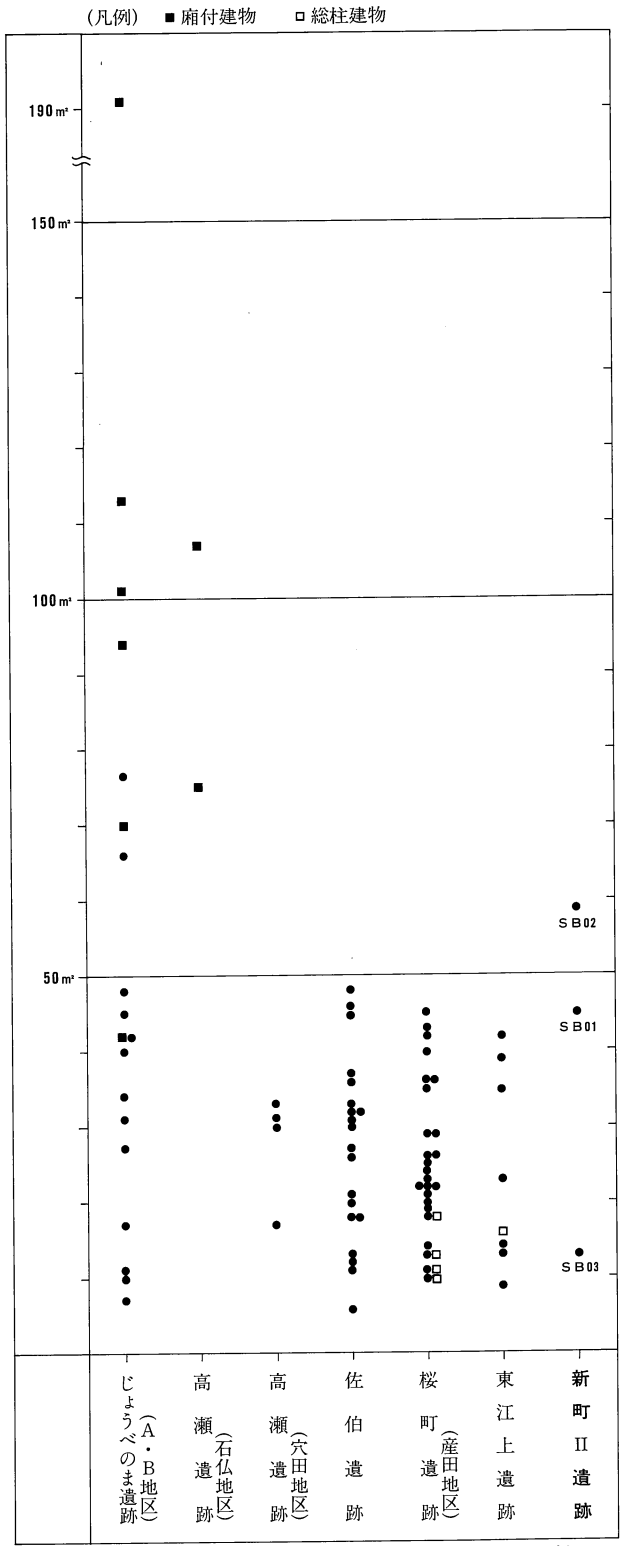
いっぽう50㎡を上まわるものは高瀬遺跡石仏地区（２棟）とじょうべのま遺跡Ａ・Ｂ地区（７棟）の２遺跡に集中し、これに新町Ⅱ遺跡のＳＢ02が唯ひとつ加わる。この計10棟は全体の13％にすぎない。高瀬遺跡の建物010（107㎡）・建物020（75㎡）、じょうべのま遺跡のＳＢ010（191㎡）・ＳＢ016（113㎡）・ＳＢ017（101㎡）・ＳＢ018（70㎡）などの大型建物がいずれも庄家跡の中心的建物群であって、かつ廂付の建物である点は注目される。言うまでもなくこれらは柱間数５間×２間以上のものによって占められている。

石川県下においても湯尻修平の研究によると、「50～100 平方メートルの平面積の建物は、横江荘々家跡、法仏遺跡Ｃ・Ｄ地区、安原工業団地遺跡などにみられるが、事例は少ない」という〔湯尻1983〕。それは集計した 213 棟中の14棟で、100 ㎡以上のもの８棟を加えても22棟(10％) にすぎない(第14図)。

以上の検討から新町Ⅱ遺跡のＳＢ02は、高瀬遺跡やじょうべのま遺跡の大型建物と対比することはできないが、富山・石川県下の集落遺跡で検出された古代掘立柱建物としてはやや卓越した存在であるといえよう。またＳＢ01（45㎡）のばあいも50㎡未満とはいえむしろ大型に属する。

**Ｂ　建物群の企画性**

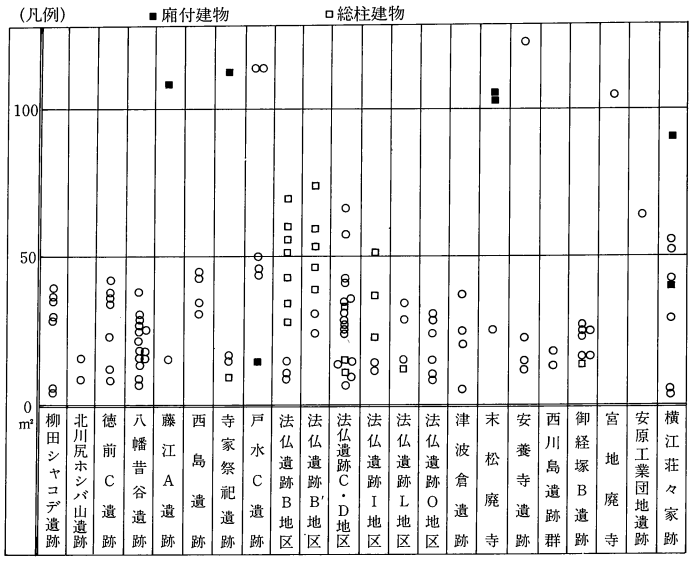
３棟の建物と柵ＳＡ04はともに同方位に統一されている。すなわち南北棟




**第13図**　富山県の古代掘立柱建物の平面積の比較

のＳＢ01はＮ23°Ｅ、ＳＢ02はＮ22°50′Ｅでほぼ同じである。東西棟のＳＢ03もその南北辺でみるとＮ23°Ｅとなり、前者と同方位である。また柵ＳＡ04はＮ24°Ｅでそれらと大差ない。

柵ＳＡ04と建物ＳＢ01との間隔は5.4ｍ、つまり18尺である。この数値はＳＢ01・02の梁間総長と同じである。Ⅲ章でふれたようにこの２棟の建物は梁間間隔を９尺で計画されたと考えられるから、その倍数の18尺（完数尺）をもって棟・柵の間隔としていることは、上記の棟・柵方位の統一性とあわせてこれらが一定の企画性のもとに構築されたことを示すものである。このことはさらに、棟・柵の柱筋をそろえている点からも窺える。すなわち、柵列ＳＡ04の南端はＳＢ01の南妻柱筋と、北端はその北妻柱筋とそろえている（第５図）。またＳＢ03の東柱筋もＳＢ01の東側柱筋とそろえている。そして棟間隔は 3.3ｍ（11尺）で完数尺で割りきれる。以上みたとおりこれらの棟・柵は整然とした配置計画のもとに構築されているのである。




**第14図**　石川県の古代掘立柱建物の平面積　〔湯尻1983〕を改変

## ３　掘立柱建物群と遺跡の性格

検出された個々の建物の性格を明らかにするためには、まずその遺跡の全体の構造を明らかにし、そのうえで個々の建物の位置づけを行う必要がある。その意味ではここでとりあげた資料は遺跡のごくかぎられた一画を調査してえられたものであるから大きな制約をもっている。しかし上の検討をとおして、建物群全体が一定の企画性のもとに構築されていること、ＳＢ02のごとく平面積・柱間数のうえから富山・石川両県下の古代建物としてはやや卓越したものを含んでいることが明らかとなった。この点は建物群さらには遺跡の性格を明らかにするうえで看過しえない。

さて、新町Ⅱ遺跡の建物群は山中敏史が宮城・国衙・郡衙建物の特徴として挙げた諸点〔山中1977〕にも確かに一部該当する。しかし、調査範囲が限られていたとはいえ高瀬・じょうべのま遺跡にみられる大型建物や廂付建物は検出されておらず、また木簡・円面硯や墨書土器も出土していない。建物ＳＢ02の卓越性を過大に評価したとしてもこの遺跡を地方官衙の一画と考えるにはなお問題が大きい。山麓の緩傾斜面に形成されているというこの遺跡の立地条件と考えあわせると、この遺跡はやはり集落遺跡とみなしうるのであり、今回の調査区はその南端の一画に該当すると考えられるのである。そう考えてよければ、富山・石川両県下の集落遺跡のなかでは石川

県の法仏遺跡C・D地区のあり方に大きな共通性を見出しうるのである。この遺跡のC・D地区（第15図）は集落遺跡でありながら柱間数5間×2間以上、平面積50㎡以上の建物をその内に含み、かつ廂付建物はみられない。また棟方向に統一性がみられるだけでなく、建物相互間の柱筋をそろえた計画的な建物配置がなされている。さらにこの遺跡で注目されることは、6間×2間の大型の建物7（67㎡）に接して付属する小型の建物8（2間×1間、15.6㎡）がみられること、同じく6間×2間の建物10(57㎡）に接して2間×1間の建物9（10㎡）が付属することである。しかも小型の建物8・9はそれぞれ大型の建物7・10の一方の桁行柱筋とそろえている（第15図）。新町II遺跡の大型建物SB01と小型建物SB03との関係は、まさしく法仏遺跡C・D地区の建物7・10と建物8・9との関係に対置しうるものである。法仏遺跡や新町II遺跡のように大型の建物が構築された遺跡では、それに接して小型の建物が付属することを示すものであろう。

**第15図**　石川県法仏遺跡C・D地区遺構分布図〔田嶋1983〕

さて、石川県下の古代掘立柱建物を総括的にとりあげた湯尻修平は、その実体を明らかにするとともに類型化を試み、その性格についても論じた〔湯尻1983〕。その論考において湯尻は法仏遺跡C・D地区を含めた第III類を「中核集落」と捉え、それを官衙遺跡と一般集落（第IV類）に対比している。またその性格を「イメージとしては小地域の郷長クラスの住居であろう」と考えている。この見解は今後あらたな資料を検証する過程で批判的に継承すべきものである。

ところで法仏遺跡C・D地区では、一般集落より卓越した大型建物が存在し、かつ計画的な建物配置がなされている。古墳時代的な竪穴住居から古代的な掘立柱建物への移行は、北陸地方では7・8世紀の「時間的」な流れのなかで達成されていることは疑いないが、そのばあい、この法仏遺跡にみられるように「空間的」にも古墳時代いらいの集落を廃絶し、あらたな空間占拠を行ったうえで上記の計画的建物群が形成されていることに注目すべきであろう。その意味では、法仏遺跡C・D地区はあらたに成立した「計画村落」とも呼びうるものであり、そのうちに柱間数5間×2間以上、平面積50㎡以上の大型建物を含むということは、その形成における上からの強い計画性と主導性をぬきにしては成立しえないものである。それを荷なった階層を想定するとすれば、有力な「村落首長」層、それも湯尻のいう「郷長クラス」にとどまらず律令国家の地方

行政機構につらなる在地官人層＝郡司クラスにまで拡大してとらえるべきであろうと思われる。この点の追究は今後の課題として、法仏遺跡Ｃ・Ｄ地区との共通性を評価するならばこの新町Ⅱ遺跡も「一般集落」から卓越した「中核集落」である蓋然性が大きい。おそらくその集落は村落首長クラスの主導によって形成された計画村落であったと推考されよう。

法仏遺跡Ｃ・Ｄ地区に代表される「中核集落」は、村落首長の主導性のもとに新たな土地を占拠し計画的に形成されたもので、新たな土地開発の拠点的集落であっただろうとの見通しをもっている。とりわけ北陸地方では、数多くの初期庄園の設定に象徴されるように、８・９世紀以降、権力による上からの平野の開発が大規模に進められており、在地でそれを直接主導したのが郡司層を含めた村落首長クラスであっただろう。そのばあい、肥沃な未墾地をひかえた土地に、彼らによる開発拠点として計画村落があらたに形成されたことは多分に考えうることである。上にふれた「開発拠点集落」については、今後の資料の増加を俟ってこうした視点からあらためて論じたいと考えている。（岸本雅敏）

## 引用・参考文献


ア　安念幹倫・高木場万里・山森伸正・林浩明　1985　『富山県小矢部市桜町遺跡―産田地区発掘調査概報―』　小矢部市教育委員会

オ　小笠原好彦　1979　「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』第25巻第４号(100号) 考古学研究会

カ　狩野睦・橋本正春・松島吉信・田上浩幸　1984　『富山県婦中町友坂遺跡調査報告書』婦中町教育委員会

キ　岸本雅敏　1981　「東江上遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町遺構編―』　上市町教育委員会

岸本雅敏　1982　『香城寺遺跡の調査』　福光町教育委員会

鬼頭清明　1979　『律令国家と農民』　塙書房

タ　田嶋明人　1983　「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡―加賀・能登の掘立柱建物群群を中心とした覚え書―」『北陸の考古学』　石川考古学研究会

高島忠平・橋本正・舟崎久雄編　1984　『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』　富山県教育委員会

ハ　橋本正・岸本雅敏　1975　『入善町じようべのま遺跡発掘調査概要(3)』　入善町教育委員会

橋本正・神保孝造・岡上進一・久々忠義　1978　「５、高沢島Ⅱ遺跡」『富山県砺波市梅檀野遺跡群予備調査概要』砺波市教育委員会

橋本正・上野章・山本正敏・池野正男・松本幸治　1979　『富山県魚津市佐伯遺跡発掘調査概要』　富山県教育委員会

ミ　宮田進一・田上浩幸　1985　『富山県婦中町新開遺跡・新町Ⅱ遺跡―発掘調査概報―』　婦中町教育委員会

ヤ　山中敏史　1977　「２．宮城・官衙跡」『考古資料の見方《遺跡編》』　柏書房

ユ　湯尻修平　1983　「加賀・能登における掘立柱建物の類型と性格」『東大寺領横江荘遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会

ヨ　吉岡康暢　1981　「珠洲」『日本やきもの集成　４　北陸』　平凡社

吉田　晶　1981　『日本古代村落史序説』　塙書房

付載

# 新町II遺跡出土の尖頭器

奥村吉信

小稿で紹介する尖頭器は発掘時に排土から採集したものである。調査後半に地山である赤褐色土を掘り下げ、遺物集中地点の検出を試みたものの、他に石器を見出すことはできなかった。本遺跡で検出された中世の遺構によって、すでに原位置を離れていた状況が想定できる。また、富山平野では該期の尖頭器の単独発見例が多く、本遺跡を含めて遺跡の性格の一端を提示しているといえる。

小稿では資料の紹介をした後に類例の対比を試み、資料が編年されるいわゆる旧石器時代終末から土器出現期にかけての富山平野の様相を概観しながら、この資料が保持する性格を探ってみる。

## 1　資料の紹介

検出した石器は尖頭器の胴部で、基部と末端部が折断をうけている（第1図）。いずれもA面に打点をもつ折断面である。現存する長さは11.0cmで幅 4.8cm、最大厚 1.2cmをはかる。側辺の湾曲から全形を復元すれば、長さが約19cmとなり、かなり大型の木葉形尖頭器となる。最大幅は中央よりやや基部側にあり、ほぼ直線的な側辺をもつ。

石材は縞状構造の発達する輝石安山岩で、表面の風化が著しい。よって、剥離面の切りあいを判読することは難しいが、石器の中央部には概して大きな剥離面が残り、側辺に連続した小剥離が並ぶ。後者は押圧剥面による二次加工であるが、素材の中央部までには及ばない整形となっている。この剥離はA面の左辺とB面の左辺に顕著に認められ、いわゆる錯交剥離がなされている。

## 2　石器の対比

本遺跡出土の木葉形尖頭器の類例を富山平野内に求めることは難しい。形状に着目して、全国的に視野を広げれば、大きくふたつの石器群に類例を求めうる。ひとつは九州から瀬戸内地方にかけて分布する大型尖頭器の一群であり、他のひとつは主に東日本を中心として分布するいわゆる神子柴型尖頭器である。

前者を代表する遺跡として佐賀県多久市に所在する多久三年山・同茶園原遺跡をまず指摘できる（杉原他1983、西村他1979）。多久三年山遺跡では讃岐石と呼ばれる安山岩を主要な石材とし素材として横長剥片が多用されているという。器面には「階段剥離」による二次加工が施され、概して粗い剥離面となっている。これに対して多久茶園原遺跡では押圧剥離が施され、幅広で薄く仕上げる整形技術となり、両遺跡の技術上の相違として指摘されている。熊本県柿原遺跡から採集の木葉形尖頭器も多久茶園原遺跡に類似する（杉村1967）。瀬戸内地域では岡山県鷲羽山遺跡（鎌木1956、山本1969）、広島県冠遺跡（三枝他1983）、国分台遺跡群の一部（竹岡1976）な

どで類例が検出及び採集されている。しかし、安山系石材を使用する点では共通するものの、概してやや幅広で長さが10cm前後を示すものが多いなどの相違点がある。

後者には長野県神子柴遺跡（藤沢他1961）や同横倉遺跡（神田他1958）などからの出土例が該当する。神子柴遺跡では16点が報告され、「先端と基部は鋭く尖り、胴部の基部に近い部分が最大幅となる形態」を呈する。器面の二次加工は押圧剝離等によって丁寧になされ、長さには変化があるものの14cm～17cmを計るものが多いという。使用石材は黒曜石を主体とし、粘板岩、安山岩、玄武岩など変化に富む。横倉遺跡では43点もの同様の尖頭器が集中して検出されている。ただし長さは10～13cmのものが多いということであり、神子柴遺跡と比較してやや小さい。石材も玄武岩に限定されている。

形態に着目すれば上記の二石器群に対比できるが、他の属性では相違点を指摘できる。多久遺跡群とは石材で共通するものの、二次加工技術において本遺跡出土例ほどの精密さを欠く。結果として、器厚にも違いが生じている。神子柴型尖頭器とは二次加工技術と大きさで類似するが、使用石材が異なり、また最終形状における強い規制からややはずれている。

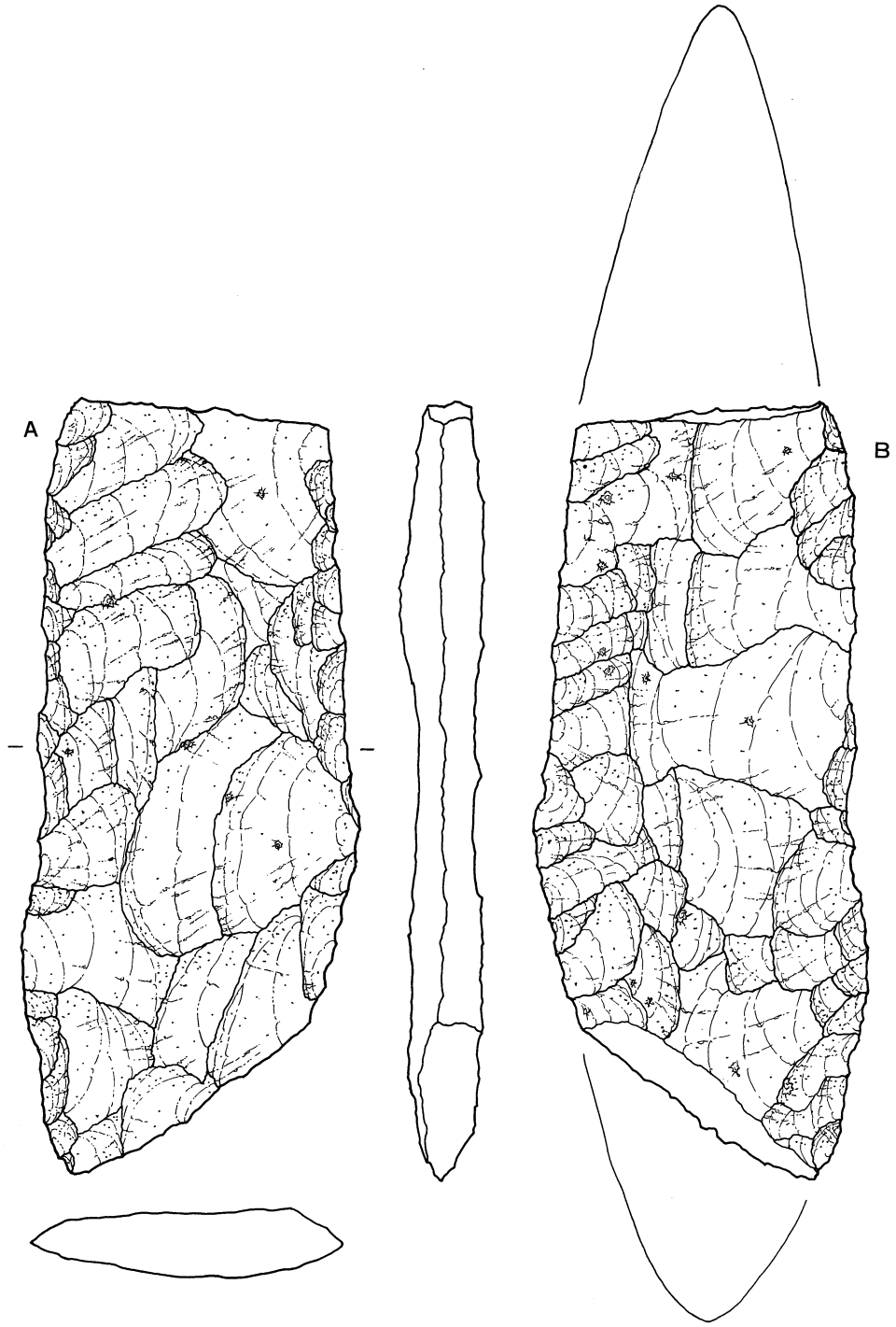
## 3　尖頭器の類型化

本遺跡出土資料の富山平野内における位置づけを考えるにあたり、既に紹介されている尖頭器(西井1974など)の整理を試みる。主に形状と大きさに着目し、５群への類型化を以下に行う（第２図）。

まず、長さが5 cm前後、幅が２cm程をはかり、ほぼ中央部に最大幅をもつ一群をまとめる。大大沢野町直坂Ⅱ遺跡では縦長剝片を素材として、周辺部のみに浅い角度の二次加工が施されたもと両面加工のものが採集されている。前者には頁岩、後者には黒曜石が用いられている。黒曜石を石材とした尖頭器は福光町立美遺跡でも出土している（西井1975など）。この遺跡ではやや大型の両面加工品や頁岩製の彫器も検出されている。同じく西原Ａ遺跡では安山岩製の小型尖頭器が単独で出土している（山本他1977）。同様の尖頭器は大山町の大川寺地内でも採集されており[註1]、草山Ｂ遺跡でもこれと密接な関係が設定できる石器群が検出されている（狩野他1986）。これをＡ群として一括する。

次に、長さがおおむね５cmから10cmの間におさまり、ほぼ中央部に最大幅をもつ一群を整理する。福光町小野丸山遺跡の採集品は頁岩製で、多量の剝片も採集されている（西井前掲）。大沢野町直坂Ⅱ遺跡出土品も頁岩であり、下半部に最大幅をもつ尖頭器や掻器も検出されている（橋本1976など）。城端町南原Ｄ遺跡の尖頭器はやや細身であり、やはり頁岩が使用されている（橋本他1976）。朝日町柳田遺跡から出土した尖頭器は安山岩製であり、やや厚みがある（山本1976）。富山市杉谷Ｆ遺跡では推定長が約17cmをはかるものが採集されている（西井他1976）。素材面を両面に残しており、縦長剝片を用いていることがわかる。石材は緻密な流紋岩質という。以上をＢ群とする。

Ｃ群はＢ群と同様に長さが５～10cmの間におさまるものの、最大幅は下半部にありいわゆる下




**第1図**　尖頭器実測図（1：1）

ぶくれした尖頭器の一群である。大沢野町直坂Ⅰ遺跡では安山岩製のものが2点採集されている。風化が激しく、先端部が欠損しているものの、かなり丁寧な整形を看手できる。直坂Ⅱ遺跡の第5ユニットからはB群の尖頭器とともに流紋岩系の石材を用いた、かなり下半部のふくらんだ尖頭器が出土している（橋本前掲）。

やはり下半部に最大幅があるものの、基部側辺がわずかに内湾する一群をD群とする。大沢野町八木山遺跡でま頁岩を石材とし　約8cmの長さをはかる石器が採集されている。1984年に実施された調査では溶結凝灰岩製のいわゆる神子柴型石斧が検出されており（関1984）、その共伴関係に着目できる。富山市の杉谷A遺跡では方形周溝墓の主体部からこの類型の尖頭器が検出されている（西井他前掲）。頁岩製で先端部と基部側の二次加工が入念になされているという。これらは、いわゆる有舌尖頭器の一群として理解されている（西井1975など）。

E群に本遺跡出土の尖頭器を該当させる。長さで10cmをはるかに超え、幅広で下半部に最大幅をもつという特徴がある。現在のところ、他に類例はみられない。

## 4　尖頭器石器群の様相

A群のうち、直坂Ⅱ遺跡採集の両面に素材面に残す尖頭器は、すでに指摘されているように（西井1974）尖頭器石器群の中では最も古い様相をもつ。二次加工技術にナイフ形石器との類似性が認められ、ナイフ形石器を主体とする石器群最終末への位置づけが考えられる。同様の尖頭器は上市町の堤谷遺跡周辺でも採集されている[註2]。立美遺跡出土の尖頭器は黒曜石を石材とし、石器組成を把握できる数少ない資料のひとつである。特徴的な掻器や両面加工品の長軸に樋状剥離を行い彫器としたものが存在する。彫器には頁岩製の縦長剥片を用いたものもある。この石器群は長野県の上ノ平遺跡（杉原1973）に対比されているが、螢光X線分析法による黒曜石の産地同定では、青森県の深浦に産地が求められており（藁科他1985）、石器群の対比に再検討がせまられている。西原A遺跡の尖頭器は前述のとおり、大山町大川寺地区の採集資料の類例があり、千葉県木刈峠遺跡（鈴木1975）や東京都仙川遺跡（小田他1974）など関東地方の諸遺跡で検出されている一群に対比できる。とりわけ、千葉県内では安山岩を使用する例が多く、より強い対比が可能である。草山B遺跡では尖頭器そのものの出土はないものの、該期の剥離技術を窺うことができる。凝灰岩を母岩とし、打面調整などの石核調整が介在せず、平坦打面からの縦長剥片剥離がなされる技術があり、ナイフ形石器などへ提供されていると考える。また、安山岩からは横長剥片が剥離され、尖頭器の素材として用いられていると考える。このような特徴は武蔵野台地における該期の剥片剥離技術（戸沢他編1983）と共通し、編年的対比の妥当性を看取する。

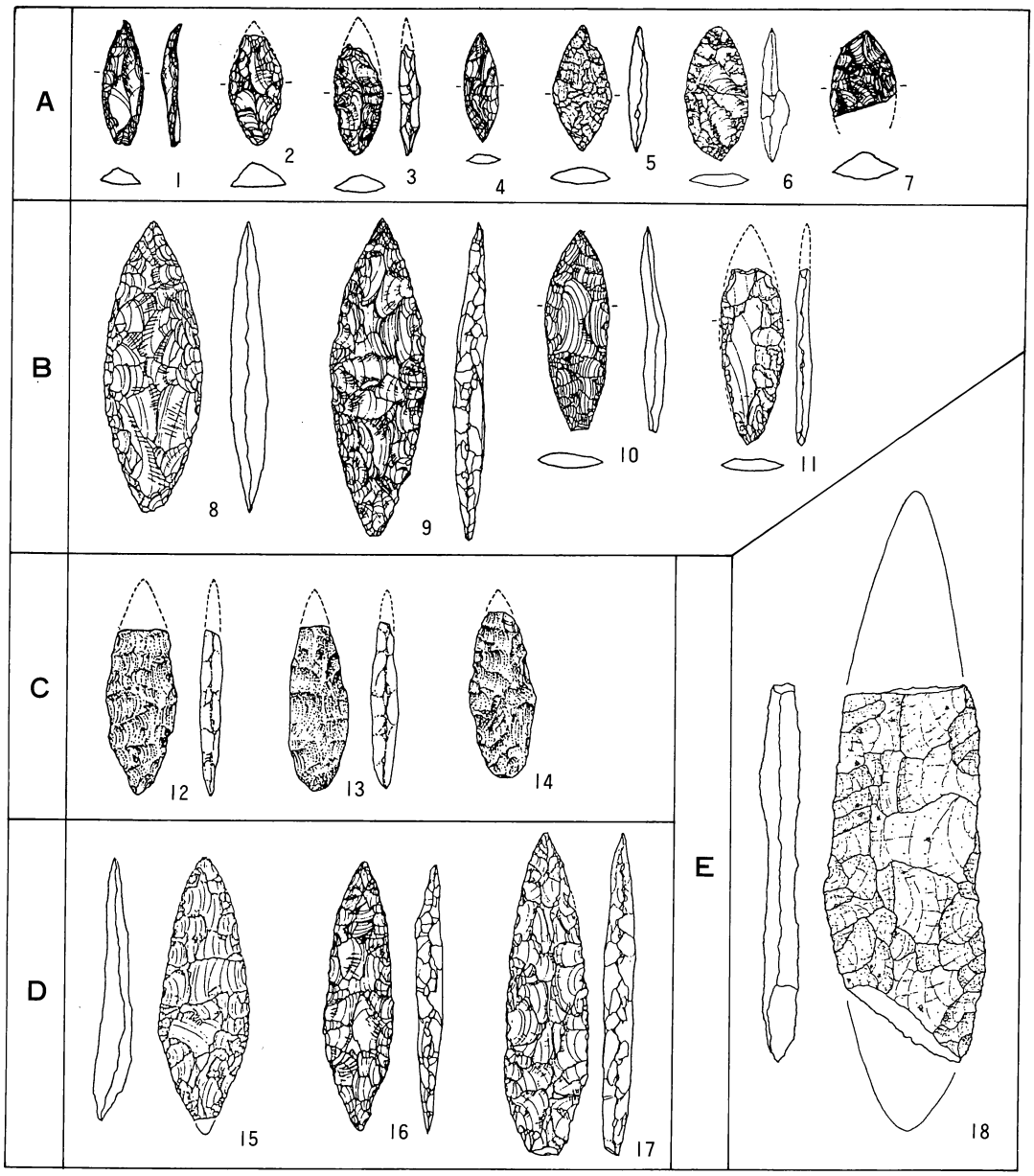
このようにA類型としてまとめた尖頭器は形態の上で一括できるものの、その系統は一様でない。対比できる地域が異なり、所属年代にも幅が考えられる。

B類型の尖頭器は、近辺では石川県灯台笹遺跡（平口他1971）や長野県小坂遺跡（高橋1963など）出土のものに類例がある。いずれも、石刃石器群後半に位置する東山系石器群に該当するが、共伴関係に不備をもつ。積極的に解釈するならば、東山系石器群終末期の様相として把握できる。

一方、東京都前田耕地遺跡ではチャートを主石材として、同様の尖頭器が多量に検出されている（橋口他1977など）。両石器群の関係や位置づけなどに問題点が設定できる。

C類型は使用石材に安山岩が用いられている点などを考慮すれば、近畿地方から瀬戸内地方にかけて検出されている木葉形尖頭器に対比ができる。ただし、これらの地域では冠遺跡を除いて層位的出土例がほとんどなく、その位置づけは不安定である。

D類型は有舌尖頭器として理解できる。富山平野での有舌尖頭器の内容はさらに変化に富む。




**第2図**　尖頭器の類型（約1：2）

1～3．直坂II　4．平岡　5．西原A　6～7．立美　8．柳田　9．直坂II　10．南原D　11．杉谷F
12～13．直坂I　14．文珠寺　15．直坂II　16．八木山　17．杉谷A　18．新町II

全国で確認されている型式をほぼ網羅するように検出されており、様相の一層の複雑さを物語っている。図示した八木山遺跡や杉谷A遺跡のように明瞭に湾曲した舌部を形成しない一群は、新潟県の中林遺跡（芹沢1966）や本ノ木遺跡（芹沢他1957）に類例が求められる。

E群の本遺跡出土尖頭器については、前述のとおり、北方的要素の強い神子柴系石器群と九州の多久石器群いずれかへの帰属を考える。いずれにせよ、富山平野をはじめとして北陸地方にはほとんど類例は認められない。この性格はおおむね他の類型にもあてはまり、該期石器群の性格を反映しているといえる。

稲田孝司は汎日本的な視野に立脚し、旧石器時代終末から土器出現期にかけての様相をまとめている（稲田1986）。それは、該期の石器群を3群に整理し、尖頭器の在地文化からの派生、「神子柴系文化」の外来的要素と在地集団によるその受容、最終段階における集団の社会的再編成などを考察している。この組み立てを富山平野という限られた地域に存在する上記石器群に応用すれば、次のようになる。前後する時期と比較して、遺跡数の少なさは他の石器群の時代幅と比較して、きわめて短期間の存続であったことを想起させ、資料の少なさは集団の小規模性を暗示している。なによりも、富山平野という狭い地域に様々な系統の尖頭器が流入していることに強力な在地集団の不在が考えられ、また、背景となる生産活動の急激な変化と不安定性も導びかれる。これらの尖頭器石器群は旧石器時代終末からいわゆる土器出現期を構成し、日本列島全体の集団構成が大きくゆれ動く時期である。それらが安定し始めた時期こそ、縄文時代の始まりであり、富山平野も例外ではない。新町II遺跡出土の尖頭器はいわば夜明け直前の富山平野の様相を提示していると総括できる。

小稿をまとめるにあたり、西井龍儀、山本正敏、麻柄一志、古川知明の諸氏から指導と助言を得た。文末ながら、記して感謝の意を表する。

註1　大山町史編さん委員久々忠義氏の教示による。

註2　上市町教育委員会高慶孝氏の教示による。

**引用・参考文献**

**稲田孝司　1986**　「縄文文化の形成」『日本考古学』6　岩波書店　ＰＰ65－117

**小田静夫他　1974**　『調布市仙川遺跡』東京都教育委員会

**鎌木義昌　1956**　「岡山県鷲羽山遺跡調査略報」『石器時代』第3号　石器時代文化研究会　ＰＰ１－11

**狩野　睦他　1986**　『富山県小杉町草山Ｂ遺跡緊急発掘調査概要』小杉町教育委員会

**神田五六・永峰光一　1958**　「奥信濃・横倉遺跡」『石器時代』第5号　石器時代文化研究会　ＰＰ48－55

**杉村彰一　1967**　「熊本県鹿本郡北町柿原発見の尖頭器」『考古学集刊』第3巻第3号　東京考古学会　Ｐ94

**杉原荘介　1973**　『長野県上ノ平の尖頭器石器文化』明治大学

**杉原荘介・戸沢充則・安蒜政雄　1983**　『佐賀県多久三年山における石器時代の遺跡』明治大学

**鈴木道之介　1975**　「木苅峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』房総考古資料刊行会　ＰＰ45－124

**関　清他　1984**　『富山県大沢野町八木山大野遺跡』大沢野町教育委員会

**芹沢長介　1966**　「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器」『日本文化研究所研究報告』第２章東北大学

**芹沢長介・中山淳子　1975**　「新潟県津南町本ノ木遺跡発掘調査略報」『越佐研究』12　ＰＰ１－19

**高橋　桂　1963**　「北信濃小坂遺跡の調査」『考古学雑誌』第48巻第３号　日本考古学会　ＰＰ61－71

**竹岡俊樹　1976**　「国分台遺跡群」『日本の旧石器文化』第３巻　雄山閣　ＰＰ78－93

**戸沢充則・鶴丸俊明編　1983**　『多聞寺前遺跡Ⅱ』多聞寺前遺跡調査会

**富山県編　1972**　『富山県史考古編』

**長崎県旧石器文化研究会編　1981**　『九州の旧石器文化（Ｉ）』　九州旧石器文化研究会・長崎県旧石器文化研究会

**西井龍儀　1974**　「富山県下の尖頭器の紹介」『大境』第５号　富山考古学会　ＰＰ１－11

**西井龍儀　1975**　「立美遺跡」『日本の旧石器文化』第２巻　雄山閣　ＰＰ255－280

**西井龍儀他　1975**　「福光町立美遺跡」『富山県福光町・城端町立野ケ原遺跡群第三次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会　ＰＰ２－18

**西井龍儀・藤田富士夫　1976**　「呉羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代草創期の遺跡について」『大境』第６号　富山考古学会　ＰＰ45－68

**西村隆司・松尾吉高　1979**　『茶園原遺跡』多久市教育委員会

**橋口定志他　1977**　『前田耕地Ｉ』前田耕地遺跡調査会

**橋口定志他　1979**　『前田耕地Ⅱ』前田耕地遺跡調査会

**橋口定志他　1981**　『前田耕地Ⅲ』前田耕地遺跡調査会

**橋本　正　1973**　『富山県大沢野町直坂遺跡発掘調査概要』富山県教育委員会

**橋本　正　1976**　『富山県大沢野町直坂Ⅱ遺跡発掘調査概要』富山県教育委員会

**橋本　正　1977**　「直坂Ⅱ遺跡第５ユニットから」『季刊どるめん』第15号　ＪＩＣＣ出版局　ＰＰ63－80

**橋本　正・上野　章　1974**　「城端町南原Ｄ遺跡」『富山県福光町・城端町立野ケ原遺跡群第二次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会　ＰＰ６－７

**平口哲夫・吉岡康暢　1971**　「石川県灯台笹遺跡の調査」『石川考古学研究会々誌』第14号　石川考古学研究会　ＰＰ61－72

**藤沢宗平・林　茂樹　1961**　「神子柴遺跡―第一次発掘調査概報―」『古代学』第９巻第３号

古代学協会　ＰＰ142—158

**藤田富士夫・関　清　1975**　『富山市杉谷（Ａ・Ｇ・Ｈ）遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

**古川知明　1984**　「立山町白岩尾掛遺跡」『大境』第８号　富山考古学会　ＰＰ103—110

**三枝健二他　1983**　「冠遺跡」『中国縦貫自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会　ＰＰ131—342

**望月静雄他　1976**　『栄村小坂遺跡緊急発掘調査報告書』栄村教育委員会

**山本慶一　1969**　「鷲羽山採集の石器と土器」『倉敷考古館研究集報』第６号　倉敷考古館　ＰＰ１—37

**山本正敏　1976**　「柳田遺跡出土の尖頭器」『大境』第６号　富山考古学会　Ｐ86

**山本正敏・上野　章　1977**　「城端町西原Ａ遺跡」『富山県福光町・城端町立野ケ原遺跡群第五次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会　ＰＰ11—15

**藁科哲男・東村武信　1985**　「富山県下遺跡出土の黒曜石遺物の石材産地分析」『大境』第９号　富山考古学会　ＰＰ７—20

# 図　　版

図版 1

図版 2

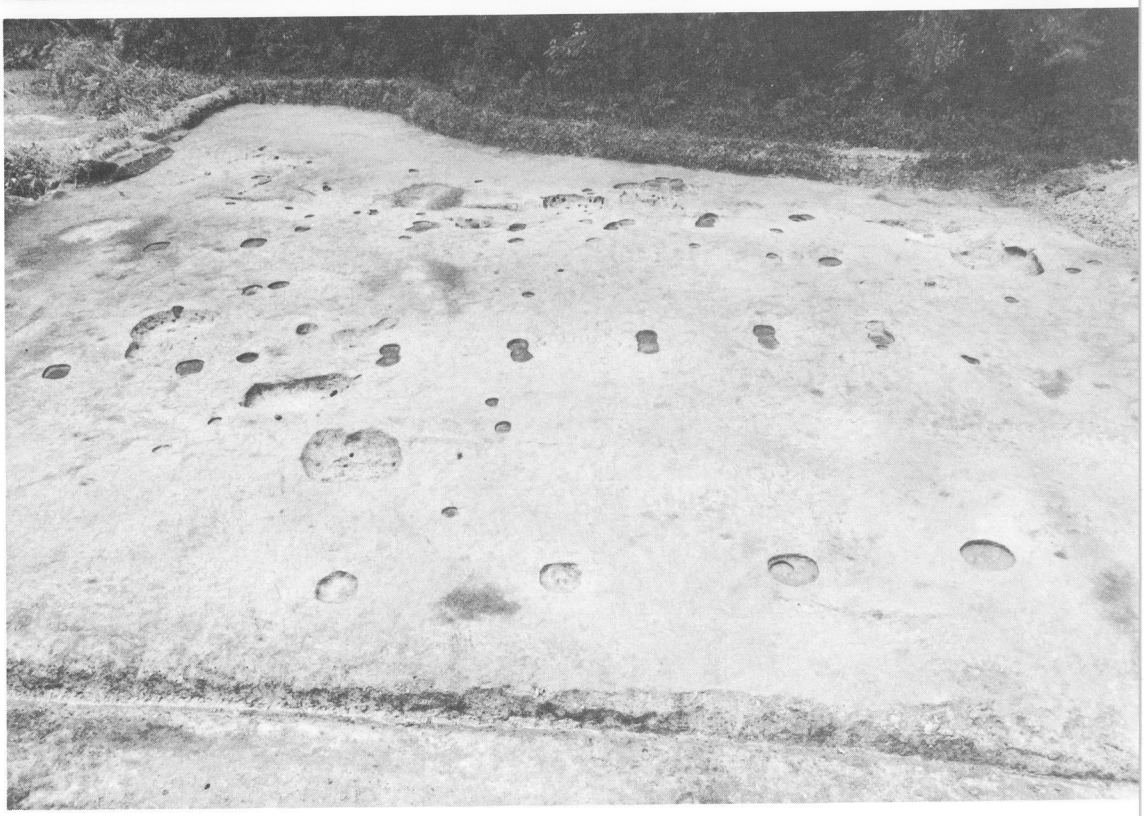
1

2

1．遺跡遠景　北から　　2．調査区全景　東から

1

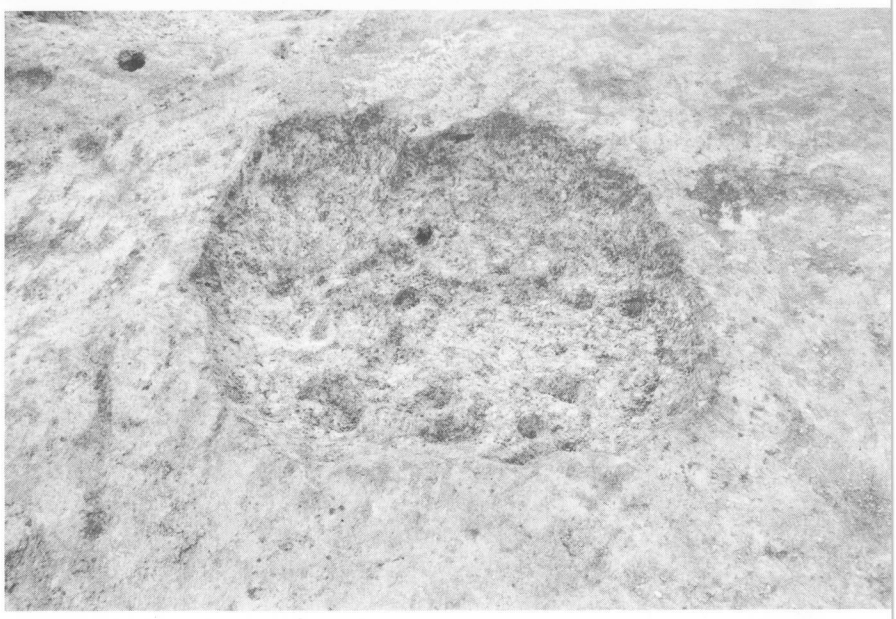
2



掘立柱建物・土坑群　1．北から　2．東から

図版 4

1
SK05
西から

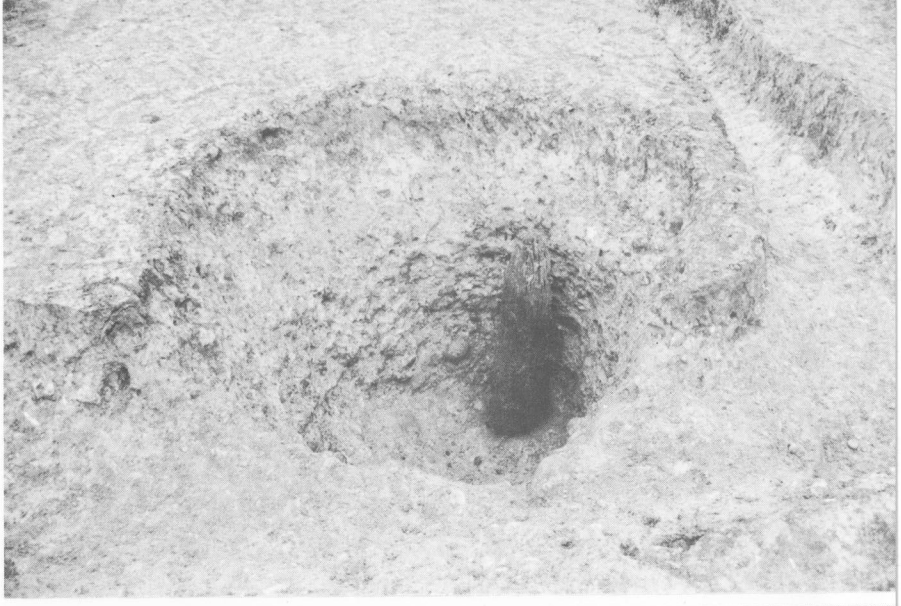


2
SK09
東から

3
SK11・12
北から

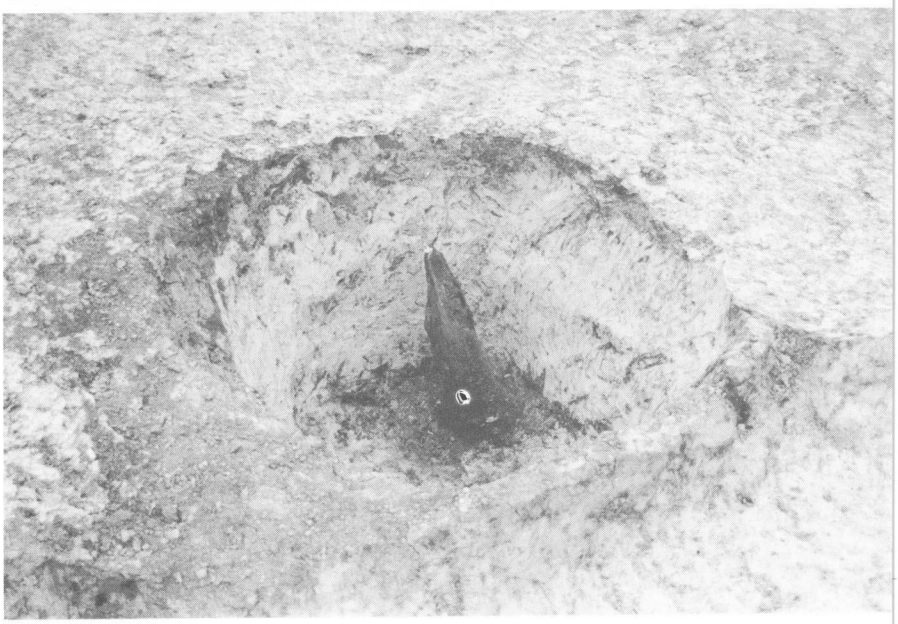
1
掘立柱建物ＳＢ21
北から

2
溝ＳＤ20、建物ＳＢ21
東から



1
P．10
北東から

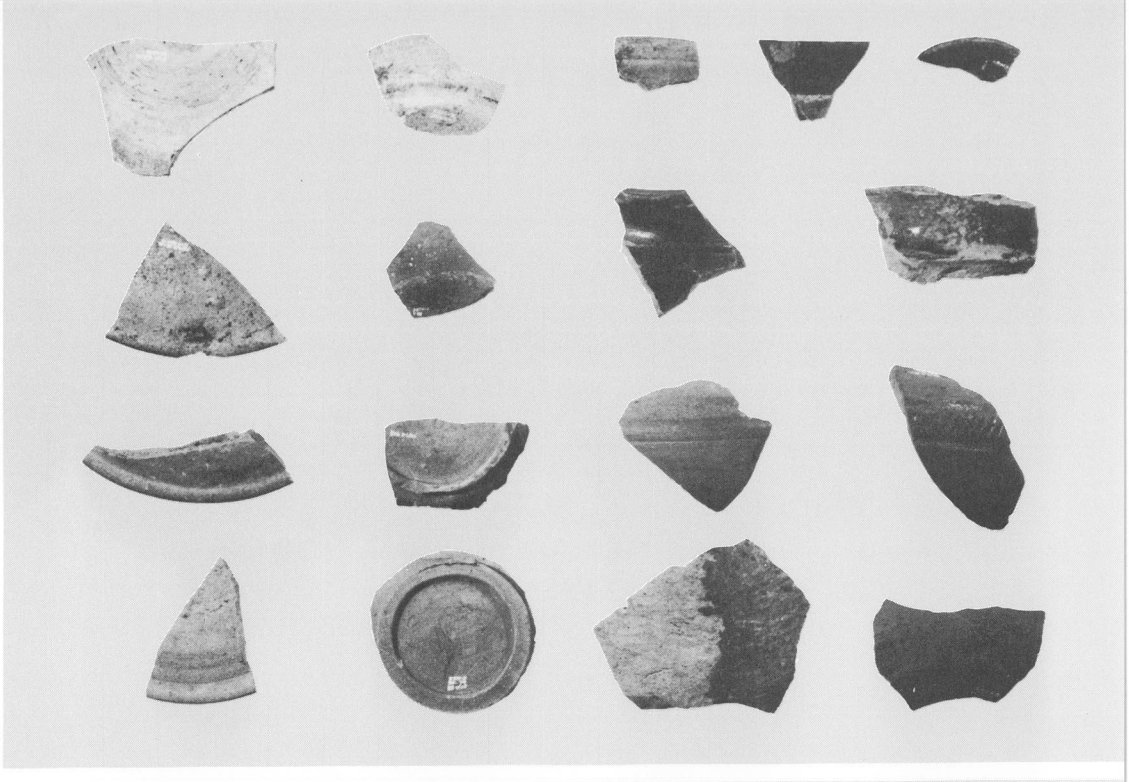
2
P．5
西から



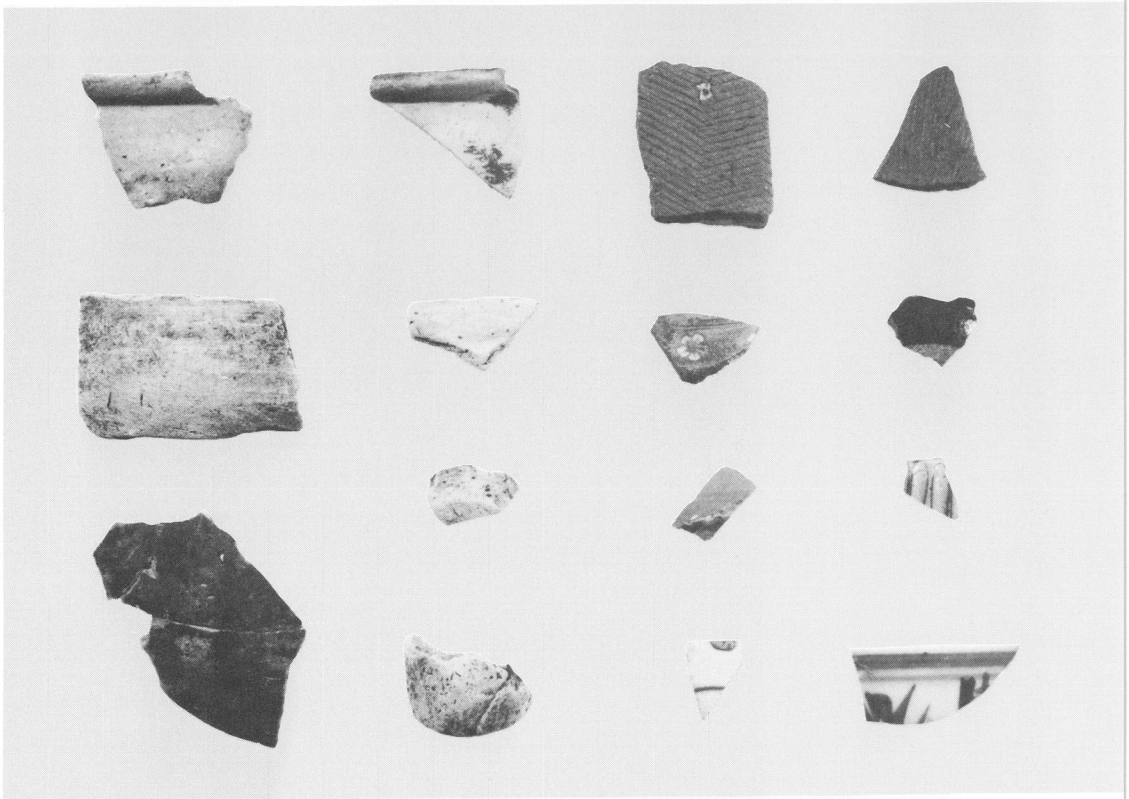
3
P．7
南から

掘立柱建物ＳＢ21の柱穴・柱根

1



2



1．須恵器　　2．土師器・珠洲・施釉陶器、土錘

# 新町II遺跡の調査

—富山県婦中町新町所在の古代・中世遺跡調査報告—

昭和61年3月31日　発行

編　集　富山県埋蔵文化財センター
婦中町教育委員会

発　行　婦中町教育委員会
富山県婦負郡婦中町速星754
TEL (0764) 65−2111

印　刷　日成印刷工業所